太陽の男

ヤマトかわいいよヤマト

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ワンピースの世界に転生した男。

幼馴染の幸せを守るため奮闘する、そんな物語。

目次

プロローグ　1
第1話　5
第2話　11
第3話　17
第4話　23
第5話　29
第6話　33
第7話　37
第8話　42
第9話　48
第10話　54
第11話　60
第12話　66
第13話　71
第14話　75
第15話　81
第16話　89
第17話　95

プロローグ

今俺は猛烈に逃げ出したい気持ちでいっぱいだった。
まずひとつ覚えて欲しいのは俺は転生者だ。
何番煎じだよなんて思いは置いておいてこの状況はまずい。ヒジョーにまずい。
俺が生まれ落ちたのは江戸の街……のような場所。
最初は過去にタイムリープかな？的なことを思ったとも。でもここで暮らしていくうちに見たことある顔らしき人物を見かけるようになった。
初めは気にも止めてなかった。でも、今俺の隣に座る”１人の幼女”と先程まで見ていた”とある光景”によりここがあの世界だということを理解した。
「ひっぐ…えっぐ…」
ひとまずどうしよう。隣の幼女が一向に泣き止みそうにない。
ここはひとつ明るいギャグを、と思ったが”あれの後”にそれは酷だなと断念。
ひとまず声をかけよう。うん、そうしよう。
「そろそろ泣き止んでもらえないかな、”ヤマト”くん」
ヤマト、男のような名前だがれっきとした少女の名だ。
「だって……だって……えぐ、ひっぐ……」
そんなしゃくり声を上げながら仕切りなしに目から溢れる液体を手で腕で乱暴に拭いている。
なんでこんなことに、それは数時間前に遡る。
それはとある町の笑われ者…いや、笑われ者になってしまった男の公開処刑があった。
なんやかんやで街はパニック。男の処刑後ちょっとしたいざこざが起きとある城にて大男がとある小さな子供を最上階から落とそうとしていた。
隣で泣くヤマトはその男の子を助けようとその場に向かったが何も出来ずに見ていることしか出来なかった。結果的にその子供は落

とされることは無かったが燃える城へと放り込まれ生存は絶望的。そんな光景を目の当たりにし、自身の無力さに涙を流しているというわけだ。
なんとまあ優しいやつだ。お前のせいじゃない。気に病むことは無い。
かけたい言葉は山ほどあるが傷口に唾をつける程の効果もないだろう。
そういう奴だ。
だからここでかける言葉はこれしかない。
「強く…なろうな？」
ヤマトの方は見ない。ただ真っ直ぐ破壊された街に目を向ける。
隣では何度も首を縦に頷きながら泣きじゃくる1人のか弱い少女がいた。
俺はワンピースの世界、ワノ国に生まれていた。
◆◆◆
あれから3年くらい経った。
俺はあれから体をちょくちょく鍛え、覇気の習得に勤しんでいた。
覇王色までとはいかないまでも武装色、見聞色くらいは身につけておきたい。そんな気持ちから始めたマイペースな特訓だが安定して使えるかと言われれば微妙だが、ある程度感覚は掴めてきた。
「うし」
今日は調子がいい。昨日よりも感覚が研ぎ澄まされているような不思議な感覚がある。この調子で何とか完璧に物にしていきたい。
そんなことをしていると、
「あ、見つけた！」
「ん？あぁ…ヤマト…」
「む？なんだその反応は？僕が来て嬉しくないのか？」
「いや、まあ、うるさいし」
「なんだとぉ！」
あれから暇があれば俺に会いに来るヤマトくん。
あの日が初対面だったというのになかなかに懐かれてしまったみ

たいだ。
　ちなみに言うとこの頃にはヤマトくんは覇王色の片鱗を見せていたりする。俺もほすい…。
「それにしても君の型って綺麗だよね」
　俺の動きを見たヤマトがそんなことを言う。
　前世から色んな武術かじってたし、この街でもそういうことに関する本とかはあるわけで自衛手段として覚えた古今東西のあらゆる武術を組み合わせて作った俺による俺だけの俺のための武術の型を練習している。
　意外と氣が研ぎ澄まされるから覇気の習得にはもってこいなんですわ。
「これくらいしか取り柄ないしな」
「僕にも教えてー！」
「やだ」
　そんな会話をしつつ時間は過ぎていった。

◆◆◆

　ある日のこと。
「僕は光月おでんになる！」
アホ（ヤマト）がいきなりそんなことを言った。
　何を言っているんだコイツは？と普通はなるだろう。だが俺は転生者。ちゃんと分かってます。……いやまあよく分からないけどね。うん。
「あ、はーい。頑張ってくださーい」
「…なんか適当じゃないか？まあいいさ。つまりはだな僕がおでんになって君は僕の家臣になるということで――」
「おいおいおいおい？」
　なんと言ったこいつ？俺が家臣？
「いやだわー」
　そういう俺の顔は渋い顔をしていたと思う。
　俺は平和に生きたい。首を突っ込まなくていい問題には突っ込みたくない。この世界で生きてくならなるべく目立ちたくない。故に

こいつに付き合ってられない。
「いいじゃないか～。頼むよ～」
「引っ付いてくるな…！」
そう言いつつ顔を押し返してはいるが……いかんせんパワーが強い！
流石は四皇カイドウの娘……息子？
あとこの歳になってくるとあんた色々成長してるのよ。まずいよ？ワシの息子スタンダップするよ？
そうやって粘り続け何とか離れてもらった。
「僕より年下なくせに生意気…」
「……関係なくね？」
あとお前の方が生意気じゃね？
ちなみに俺は今８歳、ヤマトは１１歳だ。３歳差だね。
「じゃあ今から決闘だ！僕が勝ったら家臣ね！」
「いやでーす」
そう言って走り出す。
「あ、コラ待て！」
「……『剃』」
六式の１つ剃を使いその場から離脱。練習したらできたんだよね。まあ実践ではまだ無理レベルだけど。
そんな中ほうけた顔をしていたヤマトは逃げられたことに憤慨していたようだ。
「ずるいぞー！カグラー！」
これはそんな俺の物語。

第1話

「カイドウ、ぶん殴りてえ」
　たまらず溢れる言葉。ルーティンワークと化したトレーニングを終わらせ木に寄りかかりながら復興する町の様子を見ていた時に出た言葉だった。
「おや？おやおや？君の口からそんな物騒な言葉が出るなんてね。珍しい」
　あと何故か当たり前のようにいるヤマト。
「いや、腹立つし。まあ、勝てんでしょうけども。あとなんでここにいる」
　くそ、特訓場所を変えたってのになぜバレた。
　また変えなければ。
「君のことで僕が知らないことなんてあるはずないだろ？」
　怖いね最近の女は。ストーカーがデフォかよ。
　世も末。
　なら場所変えても意味は無いと。ふむ、詰みやね。
「つか、お前久々に見たな。頬も赤いし、どしたよ」
　うんまあ何となく理由はわかるけどね。転生者だからね。うん。
　ただちゃんと聞いておきましょうね。
「え？あ、あはは…ちょっとね…」
「カイドウか」
「え…あー、えー…あ、あはは」
　そんな感じで苦笑するヤマト。その反応だけでわかるぞ。わかり易すぎやしないかヤマトよ。
　なんだろうか。カイドウに対して怒りが湧きます。
　別にヤマトのためとかじゃないし？ただムカつくだけだようん。
…ホントダヨ。
「…今はまだ。最低でもあと1年は必要だな」
「え？」
「なんでも？こっちの話」

それを聞いたヤマトは不思議そうに俺を見ていた。
それからというものヤマトが次第に俺の横で俺のトレーニングを見様見真似でやるようになった。
しまいには腕立てとか俺より早く終わらせて、『次は何するんだい？』なんて聞いてくる始末。おいおい、落ち着け。
そんなこんなで俺が１０歳、ヤマトが１３歳の時である。
パタリとあいつが姿を見せなくなった。
◆◆◆
「……見張りは…無しと」
そんなセリフを物陰から吐きつつそろりそろりと進んでいく。
今俺が来ているのは鬼ヶ島という場所。カイドウの本拠地みたいなとこだ。
ここまでちょいと海があったけど泳いだ。そう、泳いだの。しかも潜水。船で行くとバレそうだからね。…まじで体力お化けになっちったな。
なぜここに来たか。それはヤマトだ。
あいつを見なくなってもう半年も経つ。心配とかじゃないよ？ただ元気かなーって見に来ただけだよ。ホントダヨ。
「……にしてもうるさいな」
どうやら離れの部屋で宴会でもやってるみたいだ。うるさい声が耳に入ってくる。
しかし、そうなればチャンスだ。みなが宴会に夢中の間にヤマトを探す。いや、まああいつも参加してたらオワオワリなんだけどね。
「ヤマトー、いるかー」
大声ではなく、だがちゃんと聞こえるような声で呼びかける。しかし、返事はない。
「ふむ」
となるとどこだろう。あのクソ親父の事だ。どこかに幽閉監禁してる可能性もある。
ならそれらしきところを虱潰しで探そう。
「……待っとけぇ」

その場で『剃』を使い移動した。

「あれっぽいな」

時間にして約３０分。それらしきところを見つけた。

そこは部屋じゃない。大きな岩だった。

大きな岩の前に少し小さな岩を置かれ縄を巻かれている。何かを封印するように鎮座するそれは異様な雰囲気だった。

俺はそれに早速近づいた。

岩の前まで来てコンコンとノック。ちゃんと挨拶はしなきゃね。

「雪だるま作ろー、ドアを開けてー」

そういうと中からガタッと音が聞こえてきた。

『か、カグラ!?な、なんでここに…』

「なんとなくだ」

驚く声を上げるヤマト。その声は若干鼻声のように聞こえた。

「何してたんだ?ほら早く出てきて雪だるま作りに行くぞ」

『か、帰って…』

「……カイドウか?」

たまらずそう声をかけてしまう。こんなヤマトの弱々しい声なんて聞いていられない。

俺の言葉に中から唾を飲む音が聞こえてきた……ような気がする。

「カイドウなんだな」

『……』

「オッケ分かった。お前今出口塞いでる岩の前いるだろ。そうだな……7歩下がって」

『……』

返事はないがなんとなく後ろの方に後ずさりしたような気配は感じれた。これも見聞色?特訓の成果だね。

とりあえず俺は右手を引き絞り、左手を前に狙いは岩のど真ん中。左手を軽く当て、狙いはずらさない。

右手の握りこぶしに力を込め、鎧を着せるイメージを持つ。すると

右手が黒く変色しだした。
よし行けた。最近の武装色の成功率９５超えたな。
そんなことを思いつつ体をひねり左手を引き右手を前へ。
ド派手な音と共に右手は岩の中へとめり込んだ。そこから連鎖して拡がるヒビ。拡がりきったところで岩は弾け飛んだ。
「よお」
「あ、え…」
「酷い顔してんな。ほら行くぞ」
そう言いながら手を差し出す。恐る恐る手を伸ばしてきたヤマトは途中で手を止めてしまった。が、強引に掴みあげ引っ張りあげる。
「おわっ！」
「うし、逃げんぞー」
そうしてヤマトの手を引きながら俺たちは走り出した。
「んで？何があったのかをどうぞ」
「……」
疑問を投げかけるが返ってくるのは無返答。いや、言おうかどうかを悩んでるって感じだろうか。
「……君に会うなって」
「ほう」
「僕はそれを拒否したんだ。”嫌だ”って。そしたら殴られてあそこに入れられた」
「だから泣いてたん？」
「……違う」
ん？この期に及んで泣いてないと申すか？それはさすがに無理があろうと思われます。
「殴られたりされるのはもう慣れた。この野郎って思うしいつかやり返してやるって、今ならそんな感じで気持ちを強く持てる。でも……」
そこまで言ったヤマトは言葉を詰まらせながらもその先を口にした。
「君に…もう…会えなくなるのかなって思ったら…！」

泣いてはない。ただ、悔しさをかみ締めてるようなそんな苦しい声でそう呟いた。
……思ってたよりも俺も思われてたのかとちょっと心がポカポカしたのは内緒だ。……別に嬉しいとは思ってないよ？ホントダヨ。
「そっか…じゃあ安心した？」
「……少しね」
照れたようにぶっきらぼうに呟くヤマト。
「……可愛くねーな」
そんなことを言う俺の口角は上がってたと思う。
そんな時、
「いたぞ！ヤマト坊ちゃんと侵入者だ！」
やべ。岩ぶっ壊した音でバレてたのかもう追っ手が来た。
「ヤマト」
「え？」
「どうしよっか？」
「……何も考えてなかったの!?」
だってしゃーないじゃん。様子見よって思ってきたら泣いてて監禁されてるんだもん。そりゃ無理やり連れ出したくなるよね。
「ちょっと失礼」
「え？おわ！」
ヤマトの膝裏と両肩を抱えるように持つ。所謂お姫様抱っこでヤマトを抱え持つ。
「走るぞー。捕まっとけよ」
「う、うん」
『『剃』』
その場から一瞬で移動。追っ手を振り切ろうとした……その時、
「!?」
急に立ち止まり、横へと跳ぶ。と、同時に振り落ちてきた巨大な金棒。
危ねー。たまたま見聞色発動してくれたけど、なかったらぺしゃんこなってたな。

そして、金棒を持つ巨大な影に目を向ける。
俺はこの日二度目の生で初の大きな壁にぶち当たった。

第2話

「ちょっとヤマト降りてて」
「うん」
そう言って抱えていたヤマトを地面へと下ろす。
ヤマトの目も目の前の大男に向けられていた。
「オメェがカグラとかいう小僧か。俺の城に単独で忍び込んだその胆力だけは褒めてやる。だが……生きては出られねぇぞ」
その迫力に押されそうになる。背中には気持ちの悪い冷や汗。今すぐドロンしたい。
だがまあ、
「上等だよ…!」
友達泣かせたツケは払ってもらわんとこっちも気が済まん。
「クソオヤジが…!」
隣に立つヤマトも目の前の大男、カイドウを睨みつけていた。
「ウォロロロロッ! 威勢だけは一丁前にあるみてェだな。だがなァ、んなもんで乗り切れるほどこの世は甘くねェ。俺を倒せると思ってるのか小僧」
十中八九無理。でもまあ、
「やるだけやる、だな」
人は窮地にこそ進化する。負け試合だとしても強さに行き詰った俺にちょうどいい壁だ。……いささか高すぎで分厚すぎる壁だけど。
それこそ赤い土の大陸(レッドライン)並だ。
とりあえず、目を開けろ。耳を研ぎ澄ませ。鼻も効かせろ、舌で感じろ。殺気は肌で。五感をフルで活用して攻撃に備えろ。カウンターは狙うな。どうせダメージは通らん。
そうして構えを取ろうと、
「”雷鳴八卦(らいめいはっけ)!!”」
「っ!」
次の瞬間俺は空中に飛んでいた。いや、飛ばされていた。
「ゲフ……」

「カグラッ!!」
ヤマトの声が聞こえる。それのおかげで何とか意識を取り戻した俺は地面へと着地した。
「……紙一重で避けたみてェだな。バカ息子が目をかけるだけある」
「はぁ…はぁ…」
っぶねー!掠った。
何とか反応して身をよじって躱したがビミョーに掠った。
てか掠っただけであんな吹っ飛ぶことある!?意識も落ちそうになったんだけど!?
血もダラダラと頭から垂れてくる。鬱陶しいったらありゃしない。
「目は死んでねェな」
「はぁ…はぁ…フゥーーあたぼうよ」
息を深く吐き整える。避け切るのは無理。なら次は、
「ムカつくぜ。その目」
そう言いながら上からそのまま無造作に金棒を振り下ろしてくるカイドウ。
シンプル故に圧倒的な破壊の一撃。
柔をもって剛を制す。左手に武装色を発動。無事に左肘辺りまでが黒く変色した。
振り下ろされる金棒に合わせて左手の甲を添える。
「いっ……!」
しかし、そのスピード、パワーは凄まじくかなりの痛みが走る。しかし、それを無視して体を左側へ左手を右へと移動させながら金棒の軌道をずらした。直後鳴り響く轟音。たまらずその衝撃で体が吹っ飛びそうになるが足に力を込め何とか踏みとどまった。
今のとこ何とかできてる。が、はっきり言って勝てる未来は浮かばない。
ここまでいなせてるのもひとえにカイドウがまだ酒で酔っていて攻撃の精度が甘いおかげだ。
通常時ならもう死んでる。
「……まさかその歳で覇気を扱えるとはなァ」

さすがに気づくか。
「精度は甘いけどな」
「その歳なら十分だろう。だが、確かに俺と殺り合うには足りなさすぎだぜ」
「チッ、わからいでか……！」
そういえば気づけばヤマトがいない。逃げた？違うな。多分、
そんなことを思ってるうちに金棒を構えてるカイドウ。あの構えは、まずいな。
「”金剛（こんごう）……鏑（かぶら）！！！”」
その声とともに感じる圧倒的気配。とんでもない衝撃波が迫ってきていた。
「”武装”」
折れかけの左手に武装色を纏わせる。このまま受ければ死ぬかもしれん。それなら左手差し出してでも生き延びる。
今まで特訓してきた武術の技のひとつ。俺による俺だけの俺のための編み出した武術の一撃。
「”猛虎一撃（もうこないちげき）！！！”」
引き絞った左の掌底を前へと突き出す。その瞬間感じる左の腕がへし折れる感触と大気が揺れる衝撃。
こんなんで止められるとは思ってない。すぐさま俺は後ろへと飛んだ。
衝撃を少しでも減らし流れに逆らわないで受け流す。かなりダメージが入るだろうが死にはしない。と思う。たぶんね！
「グッ……！」
全身から血を吹き出しつつも何とか地面へ着地右手を地面にめり込ませながら勢いを殺す。
何気自分でも驚いてる。自惚れじゃないし、カイドウが本気でもないのはわかってるがそれでもカイドウの攻撃にここまで耐えれてる事実に仰天だ。
だがそろそろきつい。てか痛い。節々が錆びてるように動かなくなってきた。

それでもそんなこと知らんとばかりにゆうゆうと近づいてくるカイドウ。
「やべぇ…」
そんな時、
「カグラから……」
「ぬ!!」
「離れろ!クソオヤジ!!」
金棒を手にしたヤマトがカイドウに飛びかかっていた。
「ヤマトォ!!」
それを目にしたカイドウはすかさずヤマトへと金棒を走らせていた。
まずい。今のヤマトに原作ほどの強さはない。あの飛び掛り方を見てもそれは一目瞭然だ。
あのまま受けたらかなりのダメージだ。
俺は、動きづらくなった足を無理やり動かして、
「”剃”」
カイドウへと一瞬で肉薄。ダメージを入れるわけじゃない。まず覇王色が無い俺には無理だ。だから吹っ飛ばす。
右に握りこぶしを作りカイドウの体へと軽く当てる。
イメージは波のない綺麗な水面に水滴が落ちたような波紋。それをカイドウの体に伝える。中に浸透させることをイメージ。
「フッ」
そんな短い息を吐きながら体へと深く押し当てた。その瞬間に弾き飛ばされたように空中に弾き出されるカイドウの体。
「っ!」
「有象無象の一撃だと思って無視してただろ?ダメージが入らないにしても邪魔はできる」
「カグラ!ありがとう!!」
その言葉と共にカイドウの顔面へと振り下ろされるヤマトの金棒。
小気味いい音を響かせながらそれはカイドウのこめかみ辺りへ直撃した。

その後俺の横に着地するヤマト。
俺は土煙に紛れるカイドウに目を向けていた。
「あぁ…ウザったいガキどもだ」
やがて土煙が晴れ見えるようになったカイドウは一切ダメージが通ってる様子はなかった。
「クソっ！」
ヤマトがたまらず悪態をつく。俺は予想はしてたから特に思うことは無いが、でも、
「きちぃな…」
さすがに体はもう限界。１０歳のガキンチョにしては頑張った方だろ。
そんな時、
「カイドウ様ぁー！」
廊下の奥の方から聞こえてくる大勢の足音と声。
追いつかれたか。
「カグラ！追っ手が！」
「はぁ…はぁ…」
「……限界みてェだな、小僧」
ああ、そうだよクソッタレ。
無理だ。もう無理。体がマジで動かん。立つのでやっとだ。
しかし、無情にも足音は近づいてくる強力な気配も感じる。大看板とか、飛び六胞とかかな。目も霞んで見えてこない。
「侵入者を捕らえろ！」
もうすぐそこまで来てる。多分囲まれた。
ヤマトかな？俺の体を揺すぶってる。でも疲れた、流石に。
でも流石に周りがうるさい。声がガンガン頭に響く。
だからたまらずこんなことを言ったんだと思う。
「うるせぇ……！頭に響く、口を閉じてろ…！」
その俺の言葉を皮切りに俺の周りの気配の大半が一気に消えた。
なんだろ。何が起きた？分からん。てか頭働かね。
ヤマトが俺に声をかけてるのだけはわかるがそれ以外はもうさっ

ぱり。

そんなヤマトの腕に体重を預けながら俺は気絶した。

第3話

「知らない天井だ」
気絶から生還した俺はそんな言葉を吐いた。
人生で一度は言ってみたいセリフ5位を言えたことに満足感を覚えながら体を起こす。
「うっ…」
左腕にズキリと痛みが走りたまらず声が出た。
そう言えばカイドウと戦ったんだっけ?よく死んでないな俺。
そんなことを思いつつ辺りを見回すと見慣れないが見たことがあるような、そんな場所にいることがわかった。
立ち上がり服に着いた土ぼこりを払う。
「ふぅ…」
一息口から零しつつ前を向くと、
「あ…」
「お、よぉ」
驚いた顔のヤマトが立っていた。
そして次の瞬間、
「カグラァァァァァァ!!」
「グフ……」
体にタックルしてくる勢いで抱きつかれた。
俺は勢いに負けてそのまま後ろに倒れていく。
床に倒れる衝撃で左腕が痛んだがそんなこと構い無しにヤマトは離れてくれなかった。
「……」
「……おい」
「……」
「なんか喋れ」
「あう」
ただ抱きついて俺の腹に顔を埋めるヤマトの脳天にチョップをかます。

頭を擦りながら離れるヤマトの顔は渋々といった感じだった。
「いきなりどうした…」
呆れたようにそう聞くが、ヤマトは押し倒さんばかりの勢いで肩をがっしり詰め寄った。
「どうしたもこうしたもないよ!?君、2日も寝たきりだったんだからね!?死んだかもしれないって何度思ったことか…」
……あーなるほど。心配かけてたわけね。ふむふむ。
え？2日も寝てたん？マジ？
「あーまあ、すまんな」
「ほんとだよぉ、良かったぁ…」
笑いながらヘナっと体の力が抜けていってるヤマト。
そんなことより、
「なんか木の棒とかない？」
「え？」
「左腕、固定したいんだけど」
むっちゃ左腕痛い……。
◆◆◆
なぜだか地面に刺さっていた刀の刃の部分をへし折り鍔を取った持ち手だけになったそれを2本腕に挟むようにして、破った服の1部で結んで応急的な処置をした俺はヤマトから事の経緯を聞いていた。
「つまりカイドウは俺を殺さずこの部屋、天の岩戸にぶち込んだと？」
「うん、そうだよ」
なぜぇ？いや、殺されないならそれに越したことはないけど俺を生かしてどうするの？
酷いことされるの？工口同人みたいに？ひぇぇぇ…。
「まあ、それならしゃーないわ。なんか期限とか言われてる？」
「3ヶ月みたいだよ」
「なるほど」
3ヶ月か……なら、
「ヤマト……特訓しよか」
「……え？」

「時間ももったいない。この監禁中にお前には覇気を覚えてもらうぞ」
こうして俺とヤマトの特訓が始まった。

「はてさて、ヤマトくん。この世界には覇気というものがある。種類は3つ。分かる？」
痛む左腕が揺れぬよう右手で固定しながらそんなことを問う。
ヤマトはうーんと頭をひねっているが一向に答えは出てこなさそうだった。
「わからない！」
程なくしてそんなことを明るい顔で言った。
うーん、笑顔は満点だね。
「まあ、そらそうだわな。とりあえずヤマト、お前にゃこの3ヶ月で3つのうち2つ、見聞色の覇気と武装色の覇気を覚えてもらう」
そう説明する俺に対してヤマトはふんふんと相槌を打ちつつ真剣な目で俺を見ていた。
うーん、美人になっちゃってお前。
「ひとまず最初に見聞色の覇気から訓練してくぞ。武装色の覇気は俺の左腕が良くなってからってことで」
じゃなきゃ俺の左腕が死んでしまう。
「特訓……と言っても何をするんだ？」
まあ、そうだな。説明しておくか。
そんなことを思った俺はまたもや服の1部をちぎりとる。
「目隠し」
「え？」
「その状態で俺の攻撃をかわせ」
「……マジ？」
「マジ」
そんなことを言いつつヤマトの目元を塞ぐようにちぎりとった服を結びつける。

ちょ、ちょっと待って。なんて声をあげているが無視だ無視。
「と言ってもハナから攻撃を躱せられるとは思ってない訳だ。てなわけで俺がどこに立ってるか気配で察知してその方向に体を向けろ。誤差は４５度まで、間違ったら脳天チョップ、はいスタート」
「え？・え!?」
そして俺は足音を立てずに移動。ヤマトはオロオロしていた。
「……こっちだ」
「あたっ！」
◆◆◆
あれから約５時間。
「そこ！」
「せーかい。次」

「そっちだ！」
「丸。次」

「ここ？」
「ピンポーン。よし、だいぶ当てられてきたな」
平面的じゃなく天井にぶらさがったりとかしてたけどそれもちゃんと当てられるようになってきていた。流石ヤマト。さすやま。
まあ、微かな音を頼りに当ててる節があるかもだけどそれを考慮してもだいぶいい。なんてったって誤差がもうほぼない。
「よし、んじゃ次は耳も塞ごう」
「え？」
「完全な気配だけで捉えられるようにするぞ」
「わ、わかった」
ここまでで１０００発以上は脳天にチョップをしたがそれはもうほぼ序盤だけ。ここまでできたなら耳塞いでもいけるかも。
そんなことを思っていると、ヤマトは自分の指で耳を塞いでいた。
「これでいい!?」
「おっけ、聞こえる？」

「……？」
聞こえてないみたいだな。よしじゃあ移動しよう。
そうして歩き始めた途端、
「カグラ、今移動した？ん？してる最中かな？」
……驚いた。これは素直にビビる。流石だ。さすやまだ。
「もういいぞ」
そう言いながら耳に指を当ててる腕を引く。
「あ、もういい？」
「おう。とりあえず今日はもう終わり。目隠しはそのままで過ごしてみ」
「分かった」
まあ、過ごしてみと言ってもここには特に何も無いけど。そんな苦労もしないでしょう。
とりあえず俺は痛みが酷いし、体が重い。
「俺は一旦寝る。お前も休んどけ」
「そうするよ」
そうして俺たちは眠りについた。
◆◆◆
俺たちは今とてつもない問題を抱えていた。
俺の対面に座るヤマトも目隠しを外し俺とヤマトで挟まれたいちに置いてあるとあるものを見ていた。
「ヤマト」
「カグラ」
「「ジャンケンポン！」」
俺はグー、ヤマトはチョキ。
これは、
「俺の勝ち。じゃ、ヤマトが食えな」
「くうぅぅぅ……」
そうしてそのあるものを差し出す。
「武士はお腹空かないのに…！」
そのとあるものとはご飯。

白米、味噌汁、水、焼き魚に漬物とフルセット1人前の食料。
どうやら3日に1回だけ一人前だけよこすみたいだ。
眠りから覚めたら置いてあってびっくりしたものです。
多分刀が置かれていたのは殺しあって飯を奪い合えてきな?それで俺とヤマトの仲を引き裂く的な?そんな目論見があったんだろうけど、俺たちは別の角度で争っていた。
それはご飯の押し付け合い。
ヤマトは、『武士はお腹など空かぬものだ』と言って食わんし、俺は俺で『断食修行には慣れてるしいい機会だから食わん』ということで食べる気は特になかった。
はっきりいって俺は水さえあれば生きてける。余裕だ。断食には慣れてる。
故にジャンケン。それで決めることにした。
お互い食べなきゃいい?おいおい食物作った人達に申し訳ないでしょうが。
「ほれ食え、ほれ食え」
「ぐぬぬぬぬ…!」
唸っていたヤマトだったが、ガバッと手に取り胃の中へと流し込んでいく。いい食べっぷりだァ。
俺も水をクイッと1口。うむ、喉が潤う。
「ご馳走様でした!」
「お粗末でしたぁ〜」
そうして食器を片付ける。
さてと、
「今日も特訓してこか」
「何でも来い!」

第４話

あれからだいぶ経った。多分1ヶ月くらい。
「クッ…」
小さなうめき声を出しつつ俺の攻撃を避けるヤマト。
もちろん目隠しはあり。掠ることは多くあれど、そんな状態で俺の攻撃を9割8分は避けられるようになっていた。
ちなみに左腕の治りも上々。念の為あと三日くらいは様子みるがほぼ治ってきていた。
「よしおっけ」
「ふぅ」
俺がそう合図すると同時に後ろへ倒れ込むヤマト。
「つ、疲れるね」
「それだけ集中できてるってことだ」
とりあえず見聞色の覇気はスタートラインから一歩踏み出せた段階には来れたかな？取っ掛りさえ掴めればこいつの才能ならすぐに実践レベルにまで鍛えられるだろう。
「見聞色の覇気の特訓はここら辺でいいかな」
「！じゃあ」
「うん。武装色の覇気の特訓に入ってこか」
これは感覚だけどどちらかと言えば見聞色の覇気より武装色の覇気の習得の方が難しいと思ってる。
見聞色の覇気は相手の気配を察する、言わば第六感みたいなものだ。だから五感を封じた状態で特訓すれば自然と身についたりする。が、武装色の覇気に関しては自分の覇気を自覚しなくちゃいけない。自覚した状態で纏う。難しいねぇ。
「次は何をするんだ？」
横になり目隠しはそのままで俺の方を向きながらそう聞いてくるヤマト。
「まずは纏う感覚を掴まにゃ何も始まらん。だから最初はすごいシンプルだ」

そう言いつつ、はい立ってと急かす。
よいせ、なんて年寄り臭い言葉を口にしつつヤマトは立ち上がり伸びをした。
「まあ言ってしまえば……力め」
「え？」
「筋肉に力込めて思いっきり力め。ただ、何も考えずに力むんじゃなくて内側から鎧を着ていくことをイメージしながらな？覇気をひり出してけ」
「な、なるほどぉ…」
困惑してる。まあ、そうだろうね。難しいしね。俺も最初そうだったし。
「はい、スタート」
「え……」
呆ける顔をするヤマト。目隠ししてるからなかなか面白い絵面だった。
「ほら、ぼさっとしない」
「あたっ」
いつもの脳天チョップが炸裂した。
◆◆◆
あれから3日。俺の左腕も治りヤマトも三日三晩、ふんぬぬぬぬぬ！と力み続けていた。
「ぷはぁ、ダメだぁ……」
「まず自分の中にある覇気を自覚だ。それを外に出して纏うんだよ。見聞色の覇気が出来るなら自覚くらいならできる。落ち着いていけー」
そういうと手のひらを見ながら何かを考えているヤマト。
そしてその場に座り坐禅を組み始めた。
「何しとん？」
「君がよくやっていたこと。何か分かるかもって」
なるほど。確かに氣を高めるとは覇気を知覚しやすいからな。だがまあ、

「集中が甘い」
「あいた！」
「あと坐禅はこう」
「いた！いたたたた！」
こいつ体が硬えなと思いつつ足を無理やり組ませる。
痛がってるがこの痛みを無視できるほどの集中が出来たら瞑想になるわけだ。
「……お前今日から寝る前に柔軟な？」
「わ、わかった！わかったから！あ……いたたたた！」
パワー型戦闘スタイルのやつの特徴。柔軟が苦手。
◆◆◆
あれから1日が経ち、
「頑張れ頑張れ出来る出来る絶対出来る頑張れもっとやれるってやれる気持ちの問題だ頑張れ頑張れそこだそこで諦めんな絶対に頑張れもっと積極的にポジティブに頑張れ頑張れ」
「ぐぐぐぅぅぅぅう!!」
いつものように特訓していた。
額に青筋が立つヤマトの顔だったがそれでもなお綺麗な顔なのはなんだか腹が立つ。
そんなことを思ってると、
「ん？」
「ぷはぁ！はぁ…はぁ…ダメだあ！」
「いや、いけてた」
「え？」
今一瞬だったが痣のような黒い点がヤマトの白い肌に出ていた。
「さっきのやつでもう1回。ＧＯ」
「う、うん。すぅーー、ふん！」
額に青筋、腕には隆起した筋肉。
そうしてそのまま力み続けること数十秒。
「お？」
手首あたりから黒い色が浮き上がり少しづつ、すこーしづつ指先の

方へと侵食していった。
「おー！よくやったヤマト」
「え？……やったぁ！あ……」
そう気を抜いた瞬間、消える武装色の覇気。
「……」
「……」
「もっかいな」
「うん」
◆◆◆
「カグラ」
ある日のこと、寝そべりながら俺の名を呼ぶヤマト。
「んー？」
「あれからどれくらい過ぎたかな」
そう聞かれたので壁のとあるところを見てみる。
そこには何かを掘ったあと。
「……2ヶ月と半月くらいだな」
「もうそんなに経ってたんだ」
俺もヤマトと同じ感想だ。こんな何も無い空間で2ヶ月以上過ごしてるとか精神を疑うレベルだ。
だが、別に辛いかと言われればそうでもなかった。
「……初めてだ」
「何が？」
「この場所で過ごして楽しいなって思えたのは」
「……あっそ」
俺もだ。こんな場所でも楽しくなれるものなんだなっと我ながら感心する。
「……カグラ」
「どした」
「3つ目の覇気って何？」
唐突だな。
とりあえず結論を言うと、この2ヶ月とちょっとでヤマトは2つの

覇気を身につけることは出来た。実践レベルかと言われれば首を捻るがこの短時間ではなかなかのレベルだ。
それからここ3日目隠しした状態で常に武装色の覇気を発動させた状態で俺と組手していた。
そんな中で聞かれた3つ目の覇気。別に教えてもいいか。
「……覇王色だ」
「覇王色…」
「一部のやつだけが扱える覇気。王の資質を持つやつが持てる覇気だ」
「……その覇気はどういう効果があるんだ？」
どういう効果か…。難しい質問だ。どう言えばいいか。言葉での説明が難しいな。
「……一言で言うならカリスマだな。王としての威厳を相手にぶつける、みたいな？威圧するだけで相手を気絶させられたりする。ちなみにお前も素質があるぞ」
「……じゃあカグラもだな」
「なわけ」
バカにしたように苦笑する俺。
「ううん、クソオヤジと戦ったあの時、カグラ使ってた」
「……は？」
「雰囲気もいつもと全然違ってたし、何より周りの襲おうとしてた人達が倒れた。クソオヤジですら目を見開いてたよ」
マジか。あの時のあの気配の減りようはそういう……。
いやでも俺が覇王色を？妄言にしか聞こえないぞ。
……でも事実なら、
「覇王色は特訓しないのかな？」
考え事をする俺にそんな声をかけるヤマト。
「んあ？ああ、これに関しては特訓でなんとかなるとかじゃないんだよ。戦いの中でレベル上げしてくしかない。特訓しないんじゃなくて出来ないわけ」
そう言うとなるほどと納得するヤマト。

とりあえず俺は今一度自身の覇気を見直すために部屋の隅へ移動し正座で座る。
脛に小石が突き刺さるがそんな痛みは露知らず。背筋を正し手は太ももに。
「カグラ？」
「……」
ヤマトの声もなんだか遠く、耳に微かに入るだけ。
集中だ。周りが気にならないほどの集中。呼吸に使う酸素も最低限に。
隣に何かいる。ヤマトだろう。ヤマトも隣で坐禅を組んだ。見なくても分かる。
それから残りの期間。俺とヤマトはそんな風に過ごしていった。
◆◆◆
「ヤマト、今日か？」
「ああ、昼頃に来るはず」
ついに今日俺たちはここを出る。なかなかに優雅でためになった監禁生活だった。
断食していたこともあり体力低下は仕方ないが不純物が落ちたようなスッキリした気分だ。
「ヤマト。とりあえず迎えが来たらして欲しいことがある」
「分かった。何をすればいい？」
即答だな。まだ要件言っとらんぞ。信頼されてるのは嬉しいけどちょっと心配なるで。
「それはな――」

そして、
「ヤマト坊ちゃん、そしてそこの痴れ者。カイドウ様がお呼びです。着いてきてください」
そんな声とともに出口が開けられた。
……あと俺の扱いもうちょっと優しくして。

第5話

耳に入って来る3つの足音。
俺とヤマト、そして先導して歩くカイドウの部下。
廊下を歩く俺たちは今気まずい雰囲気が包み込んでいた。
「……」
「……」
俺とヤマトはお互い無言。
俺は無表情でただ前を、ヤマトはそっぽを向いた状態で俺の方なんて一瞥もしない。
天の岩戸での頼み事のせいだろう。少し怒っているような様子だった。
「…フ」
前を歩くカイドウの部下が軽く笑った。
「……」
隣のヤマトは無反応。手首に繋がれた手錠からぶら下がる鎖がジャラジャラと音を上げていた。
「ここです。しばしお待ちを」
ぼーっとしているとどうやら目的の部屋に着いたみたいだ。
案内してくれたカイドウの部下は一言そう言うと中へと入っていった。
……いまなら逃げれるくね？…いや無理か。
この廊下の端の方に気配がある。包囲されてる。用意周到だね。当たり前か。
そんなことを考えていると、
「では、ヤマト坊ちゃん入ってきてください。……あとお前もな」
扉を開け手で侵入を促す案内人。
あと、俺の扱いやさしくして？あなた達の坊ちゃんのお友達ですよ？
そんな愚痴を心に留めつつ足を前へと進めていく。
中はとんでもなく広い宴会場のような場所。その奥の方にドッシ

リと座り込んでいるのはカイドウ。
酒が入ってるであろうバカでかい瓢箪を片手に俺たちを睨みつけていた。
「来たか」
「ああ、来てやった。けど僕は用はない。だからもう行く」
カイドウの言葉にそんな返しをするヤマト。
「ウォロロロロッ!!生意気なクソ息子が!」
「……僕はお前も嫌いだし、それにこいつの隣にもいたくない」
そんな捨てセリフを吐きつつ入ってきた扉を戻って出ていってしまった。
案内人の部下さんが坊ちゃん!と言って追いかけて行った。
「なんだ小僧。随分とうちの倅に嫌われたみてェじゃねぇか」
そう言うカイドウの顔はうっすらと笑みを浮かべていた。
「まあいい。あの部屋で何があったのかさして興味もねェ。俺がお前をここに呼んだのは聞きてェことがあっただけだ」
「……」
グビっと1口、瓢箪を傾け酒を飲むカイドウ。飲んだそれをダンっ!と大きな音を響かせながら地面に置き、こちらを睨みつけ、
「おめェ、うちの船に乗れ」
そんなことを言った。
「……聞きたいことと言うより命令だね」
「ウォロロロロ!おめェの強さは新世界全体で見てもその歳で中の上、上の下くれェだ。1，2年も経つ頃にゃうちの大看板並みの強さにはなれるだろうよ。ムカつくガキだが筋はある。俺の下に入れるのも一興だ。まあ別にいいんだ断ってくれてもよォ」
そう言うカイドウの顔は暗に、あの日実力の差がどれだけあるか思い知ったろう?断るわけないよな?とそんなことを言っているように思えた。
「……なるほど」
「あぁ、で?どうするよ、小僧」
それならもう答えは決まってる。

簡単だ。
「一昨日来やがれ」
一切の躊躇なく中指を立てて堂々と。
それを見ていた周りに控えていたカイドウの部下たちがどよめき出した。
これでいい。たとえ腰低くしてご機嫌とって生き残ったとしても、それじゃあ俺はあいつに顔向けできん。
「……よし、分かった。なら殺すぜ？」
笑顔から一転、額に青筋を立てたカイドウが金棒を片手にのそりと立ち上がった。
濃密な殺気。耐性がない人はそれだけで泡吹いて倒れるだろう。
俺自身前世の頃から恐怖心というものはあまり感じず、と言うよりも目付きがどうやら悪かったらしく色んな危ない人から絡まれることも多く、おかげで恐怖心をあまり持つことが無くなった。
それが今世に活きてるのかは定かじゃないがカイドウの圧じゃビビることは無い。格上相手の圧に臆することの無い精神というのは意外と大事だ。恐怖で体が固まるということは無いからね。
「……」
「……」
無言で近づいてくるカイドウ。
俺は次の挙動を逃さないように注意深く意識を研ぎ澄ませカイドウを見ていた。
そして、
「――――っ」
”雷鳴八卦!!”
避けた。避けられた。今度は掠りもしなかった。
未来が読めた？わけじゃない。
嬉しさ……よりもなんだか説明できない疑問が頭にあった。
それの答えを求めるのはだいぶ遅かった。
”金剛鏑!!”
「あ……」

体をひねりその勢いでそのまま技を放ってくるカイドウ。
雷鳴八卦はおそらく囮。空中に飛んで避けさせた俺を確実に仕留めるための次の技への布石だったわけだ。
そんなことを考えているうちに俺はその衝撃波に飲み込まれた。
「ガフッ……！」
何度か地面をバウンドして転がっていく。バウンドする度に吹き出る血が床を濡らして行った。
ようやく止まった時、全身に走るのは激しい痛み。だがその痛みのおかげで意識は何とか保たせることは出来ていた。
ただ体は全くと言っていいほど動かない。
あの時とは違う酔ってない状態の技は一味違った。体の芯に響いてくるようなそんな感じだ。しかも、全力で攻撃されてない。多分遊ばれてる。それでこれとはね。
まずいなこれは。
「ウォロロロロッ!!!血濡れの小僧…男前が上がったんじゃねェのか!?」
「ケッ！あたぼうよ。血の滴るいい男目指しとんねんこちとら」
カイドウの皮肉にそんなおちゃらける返しをするが大分キツい。せめて30秒間休ませてくれれば何とか動く事は出来る。が、
「そうかよ！なら、おめェの臓物でも派手に飛び散らせてやろうか!?」
そんな暇は無さそうだ。
金棒を振り上げその単純なパワーで叩き潰そうとしてくる。
「……」
でも、あまり不安はなかった。だって俺にはあいつがいるしね。
そんなことを思った同時に俺のすぐ横の壁が豪快な音を立てて弾け飛んだ。そして、そのままカイドウの金棒に何かが当たる金属音に似た爆発音。
土煙でよく見えないがその衝撃で晴れた先にいたのは、
「カグラ!!」
「……ちょっと遅いぞヤマト」
俺の頼れる親友だった。

第6話

『不仲の演技？』
ヤマトは首を傾げ俺の言った言葉を反復した。
時間は天の岩戸から出る前のあの時の話。
『そ。まず第一にだ。お前は丸腰だ』
『うん、まあ、そうだね』
『だからお前がここを出たらまずやるべきは武器の金棒を確保するってことだ』
『ふんふん』
正座でそんなふうに相槌を打つヤマト。
それでもなお顔が俺の胸元の高さまであるのはちょっと腹立つ。
マジでおまえらは人間？背高くなりすぎよね？
『てなわけで、カイドウの前からすんなり姿を消してほかの雑兵に不審がられないようにするにゃ不仲になるのが1番』
元々、飯の取り合いで殺し合いをさせようとしてたからね。不仲にさせるのが狙いなら利用するしかないよね。
『わかった。任せて』

「……ちょっと遅いぞヤマト」
「ごめん！見張り全部殺ってた」
「……やるぅ」
カイドウの攻撃を何とか弾き俺の横に着地するヤマト。
凄いな。精度は低いしまだまだ不完全だけど覇王色纏ってたぞ今。
「ヤマト、何でテメェがここに!?」
飯の取り合いという策が成功していたと思っていたカイドウだ。
そりゃ驚きもするか。
「はっ！そんなこと教える義理はない！」
そう言って再びぶつかり合う両者の金棒。
だが、やっぱりまだまだ実力が足りない。カイドウに押し返される

ヤマトは何とか地面に金棒をめり込ませ勢いを殺し止まる。
「カグラ！動ける⁉」
「あと１０秒は欲しい」
「分かった！」
そう言って立ち上がるヤマト。
金棒を握る手に力が入っていく。
「おい！カイ????ドウ⁉」
「ぬ⁉」
ここで初めてヤマトはカイドウと、呼び捨てにした。
カイドウ自身もそれに驚いているようだった。
「行くぞ！スゥーー」
息を吸い込みつつ金棒を構えるヤマト。
金棒の先から黒い火花のようなものが見えてくる。
「ヤマト！テメ――」
「”雷鳴八卦⁉⁉”」
それはいつぞや見た、いやさっきも見たカイドウの技。
それをヤマトが使った。
でも、
「カグラ！」
「ん？」
「どうかな⁉」
「…んー、６３点」
「う……」
完成度は低い。覇王色の覇気を纏えていたしスピードも負けてなかった。
ただやっぱり覇気の質や、素のパワーが低い。
完成系とは言えないだろう。
ただ、それでもなかなかの威力。虚をついたこの攻撃はカイドウに血を流させていた。
「テメェ……」
なんて言いながらヤマトを睨みつけるカイドウ。もう俺の事など

無視のようだ。
まあ、いいや。とりあえず体も動かせるようになった。骨が軋む感覚が身体に走るが別段そこまで動きに支障はない。
そして、俺は悠々とカイドウへと近づいていく。
腰を落とし、カイドウの体に狙いを済ませ……。
……今ならやれる。もう何回もカイドウの攻撃はくらった。力の流し方はだいたいわかった。断食していたことで余計な不純物も落ちて体の隅々に至るまで理解出来る。
ヤマトが出来たんなら俺にもできる。あいつの隣に並び続けろ。
集中……集中……、
そんなことを思いつつ左手で狙いを、右手を引き構えを取っているとやがて右手に流れてくる何かの感覚。
そして、
「カイドウさん！」
「っ」
大看板のひとりだろうか、そいつの声で俺に気づくカイドウ。
でももう遅い。
「”覇砲”ッ!!!!」
「グッ…はァ…！」
めり込む拳はカイドウの体に触れていなかった。
間に何かあるかのような変な空間。そこに迸る黒い火花。
そうしてカイドウの体は後ろへとふっ飛んでいった。
ヤマトのように金棒で地面を突き刺し勢いを殺し踏みとどまるカイドウ。
その顔は驚きの顔になっていた。
「カグラ！」
「……出来たな」
嬉しそうに笑うヤマトに親指を立ててそんな返しをする。
俺自身もだいぶ驚いてる。自分の覇気じゃないような感じ。多分ヤマトの覇気、他人の覇気に触れてみて知らず知らずで図らずとも俺自身の覇気も練度が増したって感じだろうか？

「さてと……ヤマト」
「？……あ、そうだね」
さてそんなことより、話し合っていたことを早速していこうか。
よし、
「逃げるぞ」
「ああ！」
踵を返し、２人で全力で走り始めた。
「あ？」
後ろからそんな惚けた声が聞こえる。カイドウだろう。
それを意識するだけでだいぶ笑える。
部屋の扉を２人で吹き飛ばしながら廊下へと出る。ヤマトの見張りは全部やった発言はホントらしく、まさに廊下は死屍累々。
「やるやん」
「……えっへん！」
腰を手に、胸を張りドヤ顔のヤマト。後で頭撫でてやろうな。
「でも、きついのはこっからだ」
「分かってるさ」
「気合い入れてけ」
「もちろん！」
見張りを倒したと言っても騒ぎを聞きつけこちらに向かってくる影はある訳で。
だが、
「邪魔」
「フンッ！」
止められるものもいないわけで。
なんてったって、後ろから迫って来る大看板とカイドウに比べたら可愛いもんでしょ。追いつかれたくない一心から凄まじいパワーが引き出されます。
「ヤマト、俺ここの地理はわからんから道案内よろ」
「任せて！」
こうして俺たちの脱出劇は幕を上げた。

第7話

「ヤマトーパス」
「よ……いしょ！」
「ぐあああぁぁぁぁぁあ！」
敵をヤマトに投げつけ、ヤマトが金棒で後ろへと吹っ飛ばす。
蟻が象を噛むほどのものだと思うが、追ってくるカイドウたちの多少の邪魔になっているとは思っておきたいものだ。
「カグラ！こっからどうする⁉」
「……んーどうしようね」
「ノープラン！カグラらしいね！」
そう言いつつもなおも増え続ける追っ手たち。
このままじゃジリ貧だ。
……やってみるか。覇王色も纏えた今なら出来るはず。
「ヤマト」
「ん？」
「止まるなよ……シィーーーー」
独特な呼吸法により氣を練る。これは覇気とは違う。武術において重要とされる力の流れだ。
なにか纏う訳じゃなく筋肉の躍動によって生まれる力。それにより生まれる気配。それの操作のようなものだ。
「……”圏境（けんきょう）”」
そうつぶやくと同時に速度を上げ駆け出す。と思ったら速度をいきなり落とす。そしてまた間髪入れずに速度を上げる。
足の力みはいらない。脱力からの筋肉を張る、その差で生まれる爆発力を利用して雑兵の中を駆け巡る。
そして、
「”猛虎一撃（もうこないちげき）”」
雑兵全てにすれ違いざまに掌底をぶちあてる。全て水月にクリーンヒット。フッ…決まったぜ。
雑兵は肺から息がほぼ吐き出され声も上げられずに地面に崩れ落

ちた。
「カグラすっご！」
「でしょ？俺すげーの」
目をキラキラと輝かせるヤマト。
まあ、1番びっくりしてるのは俺だけどね。こんな上手く決まるとは思ってなかった。
やっぱり薄々思ってたけど多分今の俺はスポーツのアスリートで言うゾーンに入ってる。驚異的な集中力。
今だから出来たんだろうな。逆に言えば今じゃなきゃ出来ないって訳だ。
「今のってなに!?ねぇ、なに!?」
隣を走るヤマトがそんな感じで声をかけてくる。
ねぇ、すごい楽しそうだね？今状況わかってる？後ろ見てみ？地獄が近づいてきてるよ？
「……特殊な歩法と特殊な呼吸法を合わせることで自身の気配を消すってだけだよ。なんて言うか透明人間化？する技みたいなもん」
「僕にも後で教えて！」
「やだ」
因みにとある中国武術師の人の技を参考にしました。ありがとうねほんと。前世やってたゲームで推しのおじいちゃんでした。渋カッコイイんですよねほんと。
「っ!?」
瞬間脳内によぎるひとつの光景。
「ヤマト！」
「え？」
咄嗟に俺はヤマトの腕を掴み全力で前方へぶん投げた。と同時に地面へと伏せる。
瞬間、頭上で雷のようなゴロゴロ音が響いた。
伏せた顔を前に向けるとそこには巨大な影。
「チッ！めんどくさいなお前…」
「そいつァ、俺のセリフだ……！」

カイドウが俺を睨みつけていた。
雷鳴八卦。名前に負けぬ、まさに雷鳴の如きスピードで距離を詰め覇王色を纏った金棒でぶん殴る単純、しかして強力な一撃の技。
それを使って一気に追いついてきたか。
「まずいな…」
前にはカイドウ。後ろからは大看板。
まさに、”前門の虎後門の狼”だな。
後ろをちらりと見てみる。
空を飛翔する黒い影を先頭に首が異様に長い巨体、鼻が異様に長い巨体の影が見えた。
こうなったら、
「フゥ……スゥーーフンッ”！震脚（しんきゃく）”！」
「小僧が……何もさせねぇぞ!!」
思いっきり足を踏み込み腰を落とす。辺りが地震が来たように揺れるがそれをフル無視でカイドウはこちらに向かってくる。
「ヤマト！横に飛んで壁壊せ！」
「分かった！」
変にこちらに助太刀しようとせず俺の指示で即動くヤマト。信頼されてるのか見放されてるのか……前者であって欲しいね。
そんなことはさておきだ。カイドウは今にも俺を殺さんばかりの形相で金棒を構えてる。
さっさとやるか。
そうして俺は相撲の始まり、腰を落とし両手の握りこぶしを地面につける姿勢をとる。
「俺と力比べでもしようってか!?」
”発勁（はっけ）”……」
「！」
”ヨ威（よい）!!”
そうして一気にカイドウの懐へ潜り込み両手を思いっきり体へと押付ける。俺の手とカイドウの体の間にできる空間。それを無理やり押し込み続けて圧縮し、そして、

「ぬぅッ!!!」
「うらあぁぁあ!!」
圧縮が解放され吹っ飛んでいくカイドウ。
今のうちだ。
「ヤマト!」
「空いたよ!こっち!」
「ナイス!」
２人でその出来た穴の中へと飛び入る。
「大分吹っ飛んでったな」
「まあな。でもダメージは無い。吹っ飛ばす、距離開けること優先でやったからな。それでも時間は稼げるでしょ」
そんな会話をしつつだだっ広い和室を抜けていく。
凄い。我ながら凄い。命がかかるとここまで頭は冴えるものなのかと驚いていた。
まずいな。ヤマトはこれでもなかなかの戦闘狂だ。光月おでん。彼のことで強くなることになかなかこだわってる。
そんなやつと関わってきたからなのだろうか。
……ちょっと楽しいと感じてしまってる自分が怖い。……変な癖がついたな。
「一旦どこか隠れる?」
ちょっと自己嫌悪に陥っていたところにヤマトからそんな声がかかる。
走りつつ顎に手を当て考える。
「……ありっちゃありか」
さすがに後ろが多すぎる。一旦身を隠して撒きたいのは事実だ。
「でもどこに隠れるよ?」
「そうだなぁ……どこにしよう?」
「お前、俺に似てきたよな」
「じゃあ!とりあえずあっち!」
「適当か」
とは言うもののいい案も浮かばんのも事実で。

とりあえずヤマトの先導の下俺も後を追う。
「そこの部屋に行こう！」
「おっけ」
隠れる場所が決まったのなら一旦追っ手の目を塞ぐ必要もある。
俺は少しジャンプして畳の端っこの方、そこを思いっきり強く踏みしめた。
すると剥がれ上がる畳。この邸の畳とかも特大サイズだからなかなかの大きさでいい壁だ。
それをそのまま追っ手の方へ押し蹴る。
うわあああああ！なんて声が聞こえたから成功であるだろう。そう願いたい。
その隙に２人で目的の部屋へ逃げ込む。
扉を開け中へ、すぐに閉め。そして、
「はぁーー」
２人で束の間の安堵を手に入れた。と思っていたら。
「あら？こんなところに珍しい人達が来たのね。ここも戦場になったりするの？やだねぇ」
後ろからそんな声が。
見てみると６ｍ程の巨躯。だからと言って筋骨隆々な男というわけじゃない。原作でも見た事のある妖艶な巨大な女。
「マジかよ…」
「まさかここって…遊郭…」
ヤマトの声で確信した。
こいつは、
「ところでカグラだったかしら。お前さんは私の事……好き？」

第８話

「お前さん、私の事……好き？」
マジかよぉ…！
目の前に座る巨大な女を見ながらそんなことを愚痴る。
原作だと８Ｍ越えだった気がするけど幾分か小さいか？まあ、原作と比べて時系列がだいぶ過去だ。成長途中って感じか？
俺が今１０歳ならこいつは……１４？
それで６ｍ越え？おいおい最近身長の伸びが悪い俺へのあてつけか？
「ごめんカグラ。僕自身もここら辺はあんまり来たこと無かった、と言うよりここの区画は入れさせて貰えなかったから……ミスったぁ」
「……言って欲しかったな」
トホホのホだ。
だが、幼いヤマトをこの遊郭エリアに入れなかったというのは、なんだかカイドウの親の部分のようで少し気持ち悪いと思ってしまった。
「おやおや、私の問いには答えてくれないのかい？ツンデレ……と言うやつかしら？可愛い男の子ね」
「……そんな歳離れてねぇやろが」
ちょっとムカついた。何が男の子や。背が高いからって調子乗んな。
「あら、フフ。口の悪い子……私は好きよ」
「あっそ。俺は……」
ふむ、だがこう見るとあれだな。
「見てくれはええな」
「あら、そう。ウフフ、なら……私がお前さんを飼ってあげるわ……！」
「そいつは御遠慮」
そんな言葉を吐いたデカ女は指先から糸を出してきた。
もう、悪魔の実食ってるんか。

「ヤマト」
糸を避けつつ隣のヤマトに声をかける。
「彼女はブラックマリア。あんまり面識はないけど、ちょこちょこクソ親父と話してるのを見た事あるよ」
「飛び六胞か？」
「いや、飛び六胞入りはしてない。ただ、飛び六胞に1番近しい実力はあるらしい。と言うよりもう、今の飛び六胞より強いと思うよ」
「そいつぁハッピーだなおい……！」
この歳で飛び六胞レベルか。いやだね全く。
カイドウの攻撃に対処できるなら余裕でしょと思うかもだが、この女の強みはその搦手の数だ。
”クモクモの実”、モデル『ロサミガレ・グラウボゲリィ』
聞きなれない種類の蜘蛛だがそれもそう。大昔に生きていたとされる蜘蛛だ。
動物系古代種。希少価値の高い悪魔の実って訳だ。
それにしても、
「糸が邪魔すぎる…」
体をひねりつつ避け続けるがそれでも糸は張り巡らされていくわけで。
やがて逃げ場も少なくなってくる。
さらに1度触れると離れなくなるほどの粘着性。面倒がすぎる。
「いつまで逃げられるかねぇ！さっさと捕まってあたしのものになりな！」
そう言って振り下ろしてくる長い得物。
「どでけぇ薙刀…」
手にしていたのは白ひげが持っていたような巨大な薙刀。
原作の輪入道のあれはまだないのか。
そんなことを思いつつ腰を落とし構える。
手首を柔らかく刃の横の部分に手を添え軌道をずらす。
「ヤマト！何か使えるもんないか!?」
「一応金棒取りに行ったついでに木刀なら持ってきてるけど使うかい

!?」
「くれ！」
そう言うと木刀を投げつけてくるヤマト。
「サンキュ！」
手を後ろに構えた状態で木刀をキャッチ。
その構えのまま武装色、そして、覇王色を発動。問題なく木刀へと纏うことが出来た。
「ヤマト合わせろ！狙いは糸だ！」
「ああ！」
そしてヤマトはバッティングの構えをとった。
途端にヤマトの体の前に見えてくる黒い火花。
俺もあれにチャレンジしよう。原作でも1回しか出てきてない技。
オリジナルには遠く及ばないが覇王色を飛ばすなんてイメージはあれしか湧かない。今はただ糸を一掃出来ればそれでいい。
「行くぞ！」
そんな俺の声を合図に2人で技を放った。
「”鳴鏑（なりかぶら）”ッ!!!」
「”神避（かむさり）!!”」
2人の放った衝撃波はブラックマリア自体にはダメージは入らなかったものの糸を一掃するには十分、更には後ろの壁も破壊し道もつくることに成功した。
「なっ!?」
驚くブラックマリアを他所に横を通り抜け穴へと向かう。ヤマトも俺の動きを見て着いてきてくれていた。
「は！お前さん！ちょいと待ちな！」
「悪いね。俺って教養のない女はタイプじゃないんだ。見てくれ良くても中身が腹黒いならお断り。教養身につけたら貰われてやってもいいぞ。じゃあな」
そんなセリフを残しつつヤマトと二人並んで先へ進んだ。

「なあヤマト」
　しばらくして隣を走るヤマトに声をかける。
「……なに」
「なんか怒ってる？」
「……別に」
　その声はちょっと不機嫌。
　うーん、あれかな。
「ブラックマリアか？」
「……」
「……嫉妬？」
　そう言った瞬間に頭をはたかれた。めちゃめちゃ痛い……。
◆◆◆
「とりあえず腹減ったな」
「確かにそうだね」
　どこかの部屋に逃げ込んだ俺たち。追っ手の足音も聞こえてこない。一時的に撒けているようだった。
「それにしてもここは？」
「宴会場だね」
　辺りを見回すと目に入ってくる色んな食べ物たち。
「果物もあるのか」
　あんな屈強なヤツらが食べるとは思えないな。
　そんなことを思いつつ料理を少しつまみ取り口に運ぶ。
　その時、
「おえ！なんだこれ⁉」
　ヤマトも何かを食べていたのだろう。ただ口に合わなかったようだ。
「どうしたよヤマ…ト……」
　そちらに目を向けるとヤマトが手にしていたのは。
「おま…」
「？カグラどうしたの？」
「それ、悪魔の実…」

「え？」
見てると目がおかしくなってくるような模様。そんな皮に包まれた不思議な気配を放つ果物。
悪魔の実だった。
「……ゴックンしたの？」
「……」
そう聞くと静かに頷くヤマト。
……まさかこのタイミングで食うのかお前。
「か、カグラ」
「…どした」
「吐けるかな？」
「…無理でしょ」
そういうとうわあーーー！と崩れ落ちるヤマト。
なんでこんなとこに悪魔の実が。と思ってヤマトの近くのテーブルに目を向けると無駄な装飾を施された箱が置いてあった。
なるほど、悪魔の実をゲットしたということで祝いの宴でもしていた感じかな。これはカイドウの管理不足。ヤマトに食べられてもグチグチ言えませんね。
「はぁ…」
項垂れるヤマトは何とか立ち上がりつつもため息をこぼしていた。
「まあ、しゃーない。切り替えよ」
「うん」
そう言って骨付き肉を手に取りかじりつく。
腹ごしらえはしとかんと。動けなくなったら終いだ。
「ところで」
ヤマトが弱々しい声で声をかけてきた。
「なんだ？」
「カグラの手に持ってるそれって？」
と言って指を指してくる。
目で追っていくとそれはどうやら俺の右手で、そこには。
「あ」

オレンジの不思議模様の果物が握られていた。

第９話

「カグラも食べるんだ……！」
「俺はやだ…！なんの能力かもわからんってのに食べれるか…！っておま、力強！」
　俺がいつの間にか持っていた悪魔の実。
　ヤマトがそれを掴み俺の口へと無理やり押し付けてくる。それを俺が掴んで止めるのをもうかれこれ１０分くらいしていた。
「こんなことしてる暇じゃなかろうて……！」
「じゃあ早く食べて…！」
　ぐぬぬ、ぐぬぬと２人で押し合いが続く。
　その時、
「「ん？」」
　なにかかすかに聞こえてくる音。
　これは、
「足音か？」
「だね」
「「……」」
　お互い無言になる俺たち。
　出入口に目を向け、そして、
「ここか！」
「フッ…！」
「フンッ！」
　扉が開かれた瞬間、間髪入れずに吹き飛ばす。打ち合わせはなかったがヤマトもそれに便乗してくれた。
「時間食いすぎた」
「…ごめん」
「全くだ。まあ、こうなったんならうだうだ言わんでやるしかねえべ」
「ああ」
　背中合わせにたちながら目の前の大軍を見つめる。
「何秒でやれる？」

「２０秒」
「なら俺は１０秒だな」
そう言って俺は走り出した。後ろで、だったら僕は5秒だなんて声が聞こえた。
「撃てぇ！」
その合図とともに数十もの銃口を向けられる。
やがて飛んでくる銃弾の嵐。
「”富嶽（ふがく）”」
「っ!?」
木刀を構えながら足はとめない。
覇王色を纏った木刀を後ろからかち上げるように振り銃弾を撃ち落とし、そのまま縦に一回転、またもや後ろからかち上げつつ敵に衝撃波を放ち、次は上から振り下ろし、2度目の衝撃波。
「ぬわっ！」
横凪に払いつつ前方の敵を後ろへと吹っ飛ばしてまとまった敵に向かって突進。引き摺る木刀で地面を抉りながらそのまま敵に向かって上へと振るいまとめて吹き飛ばした。
「「わあぁぁぁぁぁぁぁ!!」」
「”三十六景浪裏荒（さんじゅうろっけいなみうらすさび）”」
よし。上手くいった。
とある浮世絵師のある作品をイメージした技で荒れた波を剣技で再現した一連の型。放つ度に威力を上げていくこの型は本来なら1人に対して使うものだが覇王色を使えばその広範囲に攻撃が届くようになるわけだ。
ぶっつけ本番でやって見たが意外と出来て良かった。
「ヤマト」
「こっちも終わったよ。どうする？」
「出口に近い方に行こう」
「そうだな……なら、こっち」
そう言って俺たちはまたもや走り出す。
「それにしてもカグラって武器使えたんだ」

「お？舐めんな？大体の武器は使えるようにはしてるぞ？」
「流石カグラ」
そんな他愛もない会話をしつつ前へと進んでいく。が、
「あ」
「……チッ」
ヤマトが何かに気づき俺が舌打ちを打つ。
目の前に現れた3つの巨大な影。
「もうどこにも行かせねぇぞ」
「ガキと油断していた……」
「……フン」
「クイーン、キング、ジャック……」
3人の声にヤマトが反応した。
ついに大看板のお出ましだ。
「カイドウさんをぶっ飛ばしたのは驚いたぜ」
「だが、まだ覇気は不完全だ」
「……油断はしねぇ」
やだなぁ。こんなん勝てるわけないじゃないですかぁ。
「ヤマト」
「どうする、カグラ」
「当然逃げの一手でしょ……！」
そう言いつつ構え、臨戦態勢を取った。
「後ろからも来てるよ。逃げ場が…」
「正面突破に決まっとるでしょ」
そう言って俺は駆け出した。そうすると形が変わっていく目の前の3人。
相手は能力者。しかも全員動物系の古代種だ。
まずダメージなんて通すことは難しい。
ならやるべきはひとつ。
変身を終え、各々が技を放ってきた。
「”貂（テン）・自尊（プラウ）・皇（ドン）!!!」
「”ブラック光火（コーヒー）!!!”」

キングの衝撃波、クイーンの光線がこちらへと向かってきた。
「フゥ……” 武装・雪蹴(せっしゅう)”」
飛んで来る光線、衝撃波に足を添える。
光線は掠めるように足に当て、軌道を導くように。衝撃波は真正面から巻きとるように足を添えそのまま軌道を変える。
「!」
そのまま引くことも無く攻めていく。狙いは足。図体がでかいこの2人の下をくぐりぬけ膝裏に蹴りを見舞った。
「おわっ!」
「クッ!」
膝が崩れ落ちるところで何とか踏みとどまる2人。
「ヤマト!」
ヤマトに声をかける。どうやらヤマトはジャックと力での押し合いをしていた。
「ぬぐぐぐぐぅぅぅ!」
「……!」
両者のパワーは拮抗している。いや、嘘だ。若干ジャックが勝っている。
でも、
「今だ!」
そう合図するとヤマトは即座にジャックを押すのに使っていた金棒を引っ込め、膝抜きをした。
「っ」
途端にバランスが崩れるジャック。その隙に股の下をくぐってヤマトは俺のとこまで走ってきた。
「よし、逃げよう!」
「おう……っ!」
と、走り出そうとした瞬間に足に痛みが走る。
さすがに大看板2人の攻撃は無傷じゃ捌けなかったらしい。
「カグラ!?」
「ヨユーよ。行くぞ」

とは言うが多分骨にヒビが入ってるかもしれない。
変な汗が出てくるようになっていた。
「……大丈夫、任せてくれ」
「あ？」
そういうと俺のことを無理やり持ち上げるヤマト。そのまま背中のほうへ回し、
「……おい」
俺はおんぶされた。
「よし行くぞ！」
「待て待て待て」
そんな俺の声虚しく走り出すヤマト。
……まあ、いいか。楽できるし。
そんな結論を出し俺は後ろを見やる。
例に漏れず大看板の３人が体勢を立て直しこちらへ向かってきていた。
「このままだと追いつかれそうだな」
そんな言葉がつい出てきてしまった。
まあ、俺一人をおんぶして走ったらそりゃヤマトでも足は遅くなりますわ。
「くぅ……！」
「…やっぱり降りるか？」
「大丈夫…！」
そんなことを言いつつも距離はだんだんと縮まってきてるわけで。
ちらっと後ろを見る。
……やべぇ…すげぇ顔。こっわ…。
視線で人殺せるレベルの形相浮かべてて寒気が走った。
そんなことを思っているとヤマトに変化が見られてきた。
極端に前傾姿勢になったかと思うと、そのまま手を床について走り始めたのだ。
「え？」
２人の声が重なった。

背中に触れてみると何やらふわふわとした毛が。
これは、
「悪魔の実か」
「え？……えーーー!?」
「叫んでないでこのまま走れ！追いつかれっぞ！」
「あ、う、うん」
四足歩行になってからは速かった。
ぐんぐん後ろとの差を開きつつ、前から来る敵の間をスルスル抜けていく。
すっごいな。なんかもう気分はも○○け姫のサンやで。
そんなことを考えつつ俺とヤマト……いや、ヤマトは廊下を爆走して行った。

第１０話

「走れ走れ」
「うおぉぉぉおお!!」
ヤマトが走りそれに乗る俺が木刀を振って追っ手を吹っ飛ばす。
そんなことを続けてはや数十分。
かなり多くの追っ手を相手にしていたのか次第に数は減ってきていた。
「この調子でどんどん行くぞ」
「ああ!……ところで」
「あ?どした?」
走りつつ俺に話しかけてくるヤマト。
俺も俺で話半分で敵を吹っ飛ばしていた。
「悪魔の実はどうしたの?」
「ああ、一応持ってきてはいる。食うかどうかは何の実か調べてから考える」
「ふぅ～ん」
なんて会話をしつつ懐から取り出す悪魔の実。
見た目的になにか見た事あるような、でもなにか釈然としないような、そんな感覚が生まれる。
ひとまず考えてもしょうがない。切り替えていこう。
そんなことを思いつつ懐へしまった。
「……カグラはさ」
唐突にヤマトから話しかけられた。
「ん?」
「海に……出るの?」
「……」
……まあ、でもそうなるか。ここから逃げてワノ国に戻ったとしても追われる日々はもう確定事項だしな。
「そう…なるかな」
「そっか」

ヤマトはどうするのだろうか。今ならこいつの手錠を外すことくらいならできるが。
「お前はどうする」
「……残…ろうかな？」
「マジィ？」
マジでぇ？
「どうせここから逃げるならどっちかが囮にならなきゃだと思うんだよね。それなら僕がする」
「おいおい」
「それに今の僕は弱いから……ここで強くなるよ」
「……」
覚悟はわかった。それが自分で決めた道なら俺もうだうだ言わんよ。
「だから、まあ……いつか迎えに来てくれ」
「あいよ」
「たまには手紙もくれよ？」
「あいよ」
なんだかいきなりしんみりとしちゃったな。
そう思って俺はヤマトの頭を軽く小突いた。
「あいた。なにすんだい」
「……強くなれよ」
「っ……うん」
◆◆◆
「見つけたぞ！」
「っ!?」
疲れていたのかのそのそとヤマトが歩いていたら見つかってしまったようだ。
「行くよ！」
「……」
ヤマトの言葉に俺は何も返さない。
それでもやまとはぐんぐん先へと逃げていった。

「お待ちください！ヤマト坊ちゃん！」
ドタドタと足音を立てヤマトを追う追っ手たち。
そして、その場に誰もいなくなった頃、俺は物陰から出た。
「フゥ…上手くいったか」

『これでよし』
『大丈夫そう？落ちない？』
『大丈夫だろ』
ヤマトの背中に瓦礫の塊を置きそれを縄で固定、その上から布をかぶせて隠すようにする。
『これで追っ手の前にわざと出ていって』
『思いっきり逃げる』
荷物を俺に見立てて、敵の注意を引きその間に俺はそろそろとここを出るわけだ。
ヤマトに負担をかけてマジでごめん。なるべく早く迎えに来るからね。
『……頑張るよ』
『……おう』
そう言って俺たちは拳を合わせた。

「さて、ヤマトの働きを無駄にしないようにせんと」
そう言いながらヤマトに書いてもらったこの家の見取り図を見ながら歩き出す。
「……こっちか」
そしておれの足音しか響かない廊下をひたすら走った。
◆◆◆
「フゥ、出れたか」
あれから数分も掛からずに屋敷から出てこれた。
追っ手がどれだけ邪魔していたのかを痛感しました。

「にしても足が痛すぎ。こりゃ泳いで帰るのは無理そうだな」
となれば、近くに停めてある船を一隻ご頂戴するしかないな。
そんなこんなで早速物色。
「なぁヤマト……っていねえんだった」
……慣れないなほんと。何気この5年間誰よりも一緒にいたからな。
別に寂しくはないし？うん。
「……さっさと選ぼ」
そんなことを呟きつつ船の具合を見ていく。
大きすぎず小さすぎず、一人旅に最適な大きさの船を選ぼう。
そんなことで数十秒ほどで選んだわけだが。
「うーん、海賊旗が邪魔」
掲げられる旗に目を向けつつそんなことを言う。
まあ、あれは後で取ろう。
早速乗り込んでさっさとここからおさらばだ。……ヤマト迎えに来て捕まって逃げるためにヤマト置き去りって今思うと俺くそじゃん。
はぁ……やべぇ、心が痛い。
そんなことを思って出発しようとした時。
「よォ……どこに行く気だ小僧ォ…」
マジか。
俺は恐る恐る後ろを振り返った。
そこにたっていたのはまさに鬼。そんな気配を身にまとった、カイドウだった。
「生きて出られると思ってねェよなって聞いた気がするんだが？」
「忘れたわ、そんなこと」
「……まあいいんだンなこたぁ。テメェ、悪魔の実は持ってるだろ」
「……」
あ、バレた。まあ、そらバレるわな。
どうすっかな。取り返しに来たってことだよね。それほど大事、と言うよりも強力な悪魔の実ってことか？

「まさか食ったわけじゃあるめェな？」
「……まさか、ちゃんとあるよ」
　そう言って懐から取り出し、カイドウに見せる。
「……おめェはそれを手にしてどうする気だ」
「どうもこうも何の実かも知らねぇから調べようと思ってるだけだ」
　そう言うと、カイドウはいきなり笑いだした。
「ウォロロロロ!!!!その実の価値も知らねェ癖に持っていこうと来てたのか！こいつは笑えるぜ」
「……聞くがじゃあこれは何の実なんだよ」
　笑い声だけで大気を震わせるこの男に若干ビビりながらもそんなふうに強気に聞く。
「そいつはどんな本にも載ってねェ、いわば都市伝説みてェな実だ。力は強大、だが、能力者自身も自滅するほどの力がその実には秘められている。おめェなんかが手を出していい代物じゃねぇんだぜ？」
「……動物系か？」
「あ？何言ってやがる。そいつは自然系だ。自然系悪魔の実……”サンサンの実”だ」
　サンサンの実。聞いたことも無い。
　ただ、実の名前、聞いた話から察するに、
「『太陽』か」
「あぁ、そうだ。長年、遠征にて求め続けていた実だ。早く……寄越しやがれッ!!」
　カイドウは十二分にブチギレている。この怒号が何よりの証拠。
　だが、この悪魔の実が余程大事なのか手を出しては来ない。万に一つも潰したくないんだろう。
「ＯＫわかったよ。返したら俺は生きて出られる？」
「あ？あぁ、そうだな…おめェこの国を出たいって言ってたみてェだからな縄で縛って島流しにしてやるぜ」
　どこで聞いたよこの野郎。
　まあいいやとりあえず俺の答えは決まった。
「カイドウ」

「あ？」
「俺ってお前のこと……嫌いなんだよね」
その言葉を皮切りに俺は手にしていた悪魔の実、サンサンの実に、
「っ！……テメェ！」
かじりついた。

第11話

「テメェ…！」
「へ…へへへ…！」
　睨みつけてくるカイドウに不敵な笑みを返すが今俺は猛烈にサンサンの実を食べたことを後悔していた。
　まず第1にクソ熱い。
　自身の体から漏れ出てくるように溢れてくる赤いオーラのようなもの。炎が立ち昇るというよりもドライアイスの白い冷気のような感じで辺りに広がっていくようなそんな熱を放ち続けていた。
「っ……ふぅ」
　体がピリピリと熱に焦がされるように痛む。
　自分の能力のくせにして火力が高すぎて自分の体すら焼く。これがカイドウの言っていた”能力者自身も自滅するほどの力”ってやつなのかね。
　それにこの感じ、多分ヤミヤミの実みたいな感じかもしれない。
　自然系悪魔の実のくせして実体がちゃんとある。確かに太陽は天体で形は存在するからな。そうであっても不思議じゃない。
　その代わりの圧倒的火力というわけか。
「……ウォロロロ…苦しそうじゃねェか」
「はぁ…はぁ……、余裕だよ」
　そうは言うが漏れ出る熱気を抑えることが出来ない。それどころかその熱量は増していく。
　今俺ははたから見たらどんな感じなんだろうな。赤いオーラ身にまとったかっこいい厨二病みたいな感じかな。なんてアホなことを考えてなきゃやってられん。
「そうかよ……！まあいい食ったんなら殺すだけだ」
　そう言って目の前のカイドウは形を変え始めた。
　本気ってわけね。
　そうして形を変えたカイドウ。目の前には巨大な龍が佇んでいた。
「ウォロロロ!!!おめェみてェな小僧に本気を出さなきゃいけねェって

のは癪に障るが……こっからは本気でやってやるよ…！」
まずいな。能力を手にしたとしても練度が低すぎる。制御もできやしない。このまま戦ってもまず勝てない。
「そうかよ。なら俺もやってやんよ」
そう言って俺は思いっきり能力を発動した。
「っ！」
抑えられないなら解放だ。体が焼ける痛みは酷くなるがそれでもジリ貧で戦っても突破口はない。なら一か八かで今できる全力を出すしかない。
「くっ…！」
あっついなぁほんと。
ただこのままだと辺り一体の被害は凄まじくなる。中にはヤマトだっている。
抑制が無理なら、この熱を操る。ゾーンに入ってる今なら出来るかもしれん。
熱を操作。手足のような感覚がある。ちゃんと動かせてるのが分かる。
形を作ってまとめて凝縮させて、
「……フゥ…”白炎猛虎（はくえんもうこ）”」
そうして俺は白い巨大な虎を身に纏った。
「……ますます部下に欲しくなる才能持ちやがるな」
太陽というのは水素の塊だ。
水素同士をぶつけることで核融合を起こしそれによって生まれたエネルギーが光や熱となるわけだ。
その副産物として起きる水素原子が原子核と電子に分かれることによって生まれるプラズマ。それがコロナだ。
そのコロナを作り出し形を作りまとめて生み出した白い虎。
この現象を理解してないと出来なかったな。前世の知識様々だ。
ただ、本物の太陽レベルの熱量はない。当たり前だね。そんなんなってたらこの世界終わる。てか俺の体も死ぬ。
「最終決戦てやつだな、カイドウ」

「……ああ、そうだな。おめェみてェな小僧が俺と同じ土俵に立ててるってことは認めてやるよ」
そう言ってカイドウの口から巨大な熱を感じとった。
慌てて俺も口の中でコロナを圧縮。
「”コロナ”……」
その言葉と共に口の中から眩いほどの光が漏れる。
「”熱息（ボロブレス）!!”」
「”発射（バースト）!!”」
超高音のブレスとビームがぶつかりあい大爆発が起きた。
威力はだいたい同格。俺の練度が上がれば押せるって感じか。能力は強いが活かしきれてない。
制御は出来ないが自分の限界ギリギリの火力までで無意識にセーブできてるのかもしれないな。
爆発による煙が晴れ、見えてくるカイドウの姿。ただ、そのカイドウはとぐろを巻き回転しながら天に向かって吠えた。
「”竜巻壊風（たつまきかいふう）!!”」
そう言うと同時に竜巻とそれに纏うようにしてかまいたちが複数出現。
リアルで見るとまさに天災だな。
そんなことを思いつつ俺は駆け出した。
台風を避けつつ、かまいたちは触れた瞬間にコロナの熱によって消滅。
そのまま上空に飛び上がり、
「”死・火砕（ダイかさい）!!”」
回転しながらカイドウへ体当たりする。
「グッ……、グオォォォオッ……!」
その衝撃で辺り一面に熱が広がる。
そのままカイドウの体を押さえつけながら噛み付いた。
「ぬグゥ…!」
「はぁ…はぁ…」
く、熱に体力が持ってかれるな。体も火傷で痛い。全身重症レベル

じゃないにしてもじわじわと焼かれるのはなかなかに思考を常に持ってかれる。
そんなことを思っているとカイドウの身動ぎで拘束を外された。
落下する俺とは相反してカイドウは上空へ、
「”熱息!!!”」
そうして超高温のブレスが迫ってくる。
だが、
「”爆破(プロミネンス)!!!”」
その合図とともにカイドウの周りに散りばめられた熱がバチバチと火花を上げ大爆発が引き起こされた。
カイドウに攻撃は当たったが俺もブレスに直撃。
熱いは熱いが俺自身それ以上の熱に身を焼かれてることもあってそこまでのダメージはなかった。
そんなことを思ってるうちに俺は背中から地面に激突。
痛みはなかった。上を見てみると苦しむカイドウの周りに煙が出来ていた。
しめた、今のうちにここを離れよう。
何となくでわかるがこのあと数分で俺の能力は強制的に消える。というのも無理に出力上げてたこともあって限界が近い。
そうなったらもう勝算もなにもあったもんじゃない。
幸い虎の手足から爆発させることで空を翔けることは可能だ。何とかこれで撤きたいもんだな。
そんなことを思いながら俺は海の方へ飛び出した。
◆◆◆
「ケッホ、ケッホ……はぁ、くそ」
何とかあそこから離脱した俺は木によりかかりながら森の中を歩いていた。やはりというか予想通りという鬼ヶ島がある海を越えたあたりで俺の体は元に戻れた。ただ、
「痛てぇ…」
そう言いつつ手を抑える。
俺は両手にかなりの火傷を負っていた。

まさに自滅する力。扱いきれてない能力であそこまでカイドウと戦えたのはさすがという他ないが、その代償がこれとはな。
かなり体力消耗したしゾーンも切れかけだ。覇王色の覇気も使えてあと1回か。
そんな分析しつつ足を進めると開けた場所にでてきた。
どうやらここは崖。この国の一番端に来たらしい。
下を覗いてみると、
「うわぁ…」
海が荒れ狂っている。
さて、どう下に行こうか。能力者にもなったし泳ぐのももう不可能だ。
そんなことを思っていると、
「アッパレだぜ小僧。いや、カグラ」
「……まだ来んのかよ」
後ろに立っていた、カイドウが。
後ろを振り返りつつ睨みつける。
その姿は人でもなく龍でもなく、2つを融合した、
「人獣型…」
「ああ、おめェを確実に殺すために使ってやるよ」
「俺はここを出る」
「させねェよ」
とは言うが俺ももう足は限界。戦う気力も残ってない。
そうやって立っているとカイドウはおもむろに手にしていた金棒を回しながら空へと飛び上がった。
まじかよ、あれが来んのか。
「”降三世(こうさんぜ)”……」
俺は腰を落とし、そして最後の覇気を使った。
「フゥ……”震脚”」
踏み込みと同時に没落する地面。もう、やるしかない。
「”引奈落(ラグならく)!!”」
そうして振り下ろされる金棒。

狙われた顔をずらし武装色をまとった手と肩で何とか受け止める。
「ぬぐッ……！」
それでさらに没落する地面。
なおも押し込め続けるカイドウ。
もう少しだ。もう少し耐えろ。
そして地面が割れた。
「っ！」
「へっ」
割れたところに立っていた俺は当然下へと落ちることになる。
目を見開いたカイドウの顔を最後に浮遊感を感じながら俺は意識を落とした。

第12話

「……よく生きてるな俺」

そんなことを呟きながら目覚めた。

一番に目に入ってきたのは青い空。次に目に差し込む太陽の光だ。

前までだったらその光で思わず目を閉じていただろうが、太陽の力を手に入れたからなのか目が痛くない。直視してても太陽の形がはっきり見えるようになってる。

ホントに悪魔の実を食べたんだななんて実感を感じつつ体を起こした。

そこは綺麗な砂浜だった。

「いっつ……」

少し身動ぎをした瞬間肩に痛みが走る。

見てみると、

「うわぁ…」

どうやら左肩が外れていた。

カイドウの攻撃をもろにくらったからな。これだけで済んで良かったと思うべきか。

てか、俺の左腕可哀想だな。折れたり外れたり。神様俺の左腕に恨みある？

幸いにも綺麗に外れていて良かった。これなら直ぐにはめ込める。

そんなことを思いつつ立ち上がり、右手で左腕を叩きぐるんと一周する反動ではめ込んだ。

「…っ！…ふぅ」

痛いがちゃんとハマったみたいだ。手をグッパッと開いたり腕を回したり動作を確認。少しズキリとするが些細な違和感だ。大丈夫。

それにしてもワノ国のあの激流に飲まれながらよく生きて別の島に流れ着いたもんだ。

体内に入ってくる海水が能力で蒸発してたのかは分からないが肺が水で満たされてないのは驚きだな。

「さて、こっからどうするかな」

広がる海に目を向けながら独り言をつぶやく。
腕の火傷も何とかしなきゃだし何より海を渡る手段もない。
「とりあえず島を探索するしかないか…」
そうして俺は踵を返し、森の中へと足を進めた。
◆◆◆
あれから1週間くらいかな？経った。どうやらここは無人島らしかった。
ただ、森の中には野生の獣もいて食料には困らなかった。
能力で発生させた熱で肉と海水を焼いて、沸騰させたことで出来た海の塩分の塊で肉に味付け。水は島内に流れの急な小川があったから何とかなった。
ただ、ちょっと肉が獣臭くてあれだけど。まあ、熊とかイノシシとかそんなのしかいないししょうがないね。
前世は猟友会とかに入ってたりもしたし、キャンプにもよく行ってたし問題なく生活は送れてる。
傍から見たら１０歳の子供がたくましく無人島で暮らしてるように見えるんだろうな。
「つか、船も何も通らんな」
海を眺める俺。この一週間、海を監視してたが船1隻も通らないこの場所。最悪森の木を伐採してイカダ作って海に出ることも考えなきゃいけない。
人がいないってことで能力練習にはもってこいだがここで立ち往生する訳にも行かないし。
ちなみに能力が暴走したら海に飛び込んで何とか沈静化させてる。その反復のおかげで今は勝手に能力が発動するってことも無い。良かった良かった。腕の火傷も何とか治りかけてる。この世界って怪我とかすぐ治るよね。
「あと1週間くらい待つか」
そんなことを言いつつ伸びをすると、
「グルルルゥゥゥ……」
「ん？」

森から顔を覗かせる俺の5倍はあろうかという熊。
飯が来てくれた。ラッキー。
「ゴアァァアッッ!!」
「よっ……と」
牙をむき出しに飛びついてくる熊の顔面に拳を入れる。
頬に当たる拳は熊の強靭な筋肉と骨で受け止められる。
「フン……!」
が、そのまま力を込め拳を振り抜くとゴキリと気色の悪い音が手に響き熊は地面へ崩れ落ちた。
「……今日はどうやって食おうかな」
こんな生活を送ってます。
◆◆◆
いつかの日。
「こんな島にガキがいるなんてな…」
「この島の宝についてなんか知ってるんじゃねぇの?」
「そうかもな。おいこらガキこの島の隠された秘宝の情報を教えろ。まだそんな若くして死にたくねぇだろ」
朝起きたら俺は海賊に囲まれてました。
えー、待っていきなりだねほんと。
……ヤバい、俺の知ってる海賊なんてカイドウくらいしかいないから怖さが全くないんだが?むしろこんな島に来てくれてありがとうねほんと。
「おい!口が利けねぇのかてめぇ!」
そう言って胸ぐらを掴まれる。
秘宝つっても分からねぇしな。てかそんなのあったんですね。探せばよかったです。
それにしても知ってる顔はないな。モブ海賊たちか。まあ、そう簡単に原作キャラに会えるわけもないか。しかもここ新世界だしね。
まあいいか。とりあえず移動手段が来てくれた。やっとこの島とおさらばできるな。
「ねえねえ」

「あ？」
「これ離してくれない？」
そう言って俺の胸ぐらを掴む腕を握る。
「はっ、ようやく喋ったかと思えば――」
「そういうセリフはいいから」
「あ？」
そんな腑抜けた声と共に男は手を離してくれた。いや、離させた。
とりあえず後ろの雑兵も何とかしなきゃだよな。
「……あ、お、俺の腕がぁ！」
そう言ってうずくまる男。
簡単に言えば手首の骨外しただけだけどね。綺麗に外してるから直そうと思えば自力で直せる。
「な!?……テメェやりやがったな！」
「ガキだと思って優しくしてやってりゃ調子乗りやがって……！」
「全員でかかれ！フクロにすんぞ！」
数はだいたい３０。
さて、特訓した能力を使ってみよう。
そうして俺は能力を発動。体から溢れてくる赤いオーラ。
「!?」
「能力者か！」
両手を合わせ先端を敵に向ける。赤いオーラを収束させるように合わせた両手の中へと流し込んでいき、やがて合わせた両手の周りにバチバチと電気が走り始めた。
”収束（しゅうそく）・穿火炎（フレア）”」
それを合図に指先から一直線に走る赤い筋。
それによって発生した衝撃波に敵は足を止め、飛ばされないように、踏ん張っていた。
「へ、へへ。少しびびったが別に大したことは……」
「まだだ。”超新星（ちょうしんせい）”」
「へ…？」
そんなほうけた声が聞こえた瞬間敵の隙間を縫うように走ってい

た赤い筋が急激に収縮。そこを中心に大爆発が起こった。その爆発は敵を全て吹き飛ばし地形をも変える威力だった。

さすが、威力抑えててもこれ程か。手の方は少しピリつくだけで問題は無い。”白炎猛虎”が異常に火力高い＋長時間纏うってことであんなに火傷していただけで普通に使うだけならそこまで火傷を負うことは無い。

ただ連続で技出すとなるとヤバそうだな。やっぱり基本戦闘は肉弾でやった方がいい気がするな。

さて、

「船貰うぞあんたら。文句は……ないね？」

第13話

――拝啓ヤマト殿

あなたは今何をしているのでしょう。元気でやられておりますでしょうか？

わたくしですか？私は元気にやっております。

こちらはお天気が良くお洗濯日和で毎日毎日大量の洗濯物を洗っております。

男衆の汗臭い匂いが鼻に来て燃やしてやりたいくらいです。

ん？どこで何をしているのかだって？

ただいま私は――

「新兵！遅いぞ！チャチャッと動かんか！」

「…へいへい」

「返事は一回で十分！それから”はい”だ！」

「ういっす」

「”はい”と言わんかァッ!!!」

――海軍で生活しております。

◆◆◆

海賊から船を奪い海に出たものの、ここで俺は重大な問題に直面していた。

「……遭難だな、こりゃ」

コンパスなし、航海士もおらずましてや航海術すら持っていない俺。

こうなるのは当然で、

「詰めが甘いな、ほんと。……なんで航海術を勉強しなかったんだ俺は」

そんな後悔を口に出しつつ、舵を取りながら海を眺めていた。

あの海賊たちは船にあった縄で体を縛り船内へと押し入れている。そこにいるだろう航海士を連れてくればいいんだろうがおもっくそ気絶してたから……まあ、死んでないとは思うけどとりあえずはこのまま行くしかないな。

幸い食料もたんまり蓄えてるようで数日は大丈夫そうだし、のんびりと行こう。

あれから、数日…多分3日かな？未だに島は見えない。
起きた航海士を引きづり出して案内させようとしたが俺の攻撃による余波でコンパス…記録指針（ログポース）が壊れて案内できないらしい。なんてこったい。
とりあえず航海士含め海賊たちは縛ったまま生かすか死ぬかレベルの水と飯を与えてる。
そんなこんなで今日も海を眺め舵を切る。
「～♪声を上げて～♪さあ出航だ～♪我ら宝しょ……ん？」
鼻歌を歌ってる時前方に見える影。あれは船か？
「……望遠鏡はどこに置いたっけな？」
船内に戻り望遠鏡を手に看板へまた出て、そのまま影へと向かって望遠鏡を向けてみる。
「…あー、海軍か…ちょうどいいな」
そんなことを呟きつつ望遠鏡をしまい、用意していた旗を取りだした。
その旗は木の棒の先に白い布を取り付けた簡素なものだ。
その旗を海軍船へと向かって振る。
これで攻撃してこないだろう……多分。いや、サカズキあたり乗ってたら死ぬなうん。
と、そんな考えは杞憂で終わり俺の乗る船の横にその海軍船はピタリと横に止まってくれた。
「……君がこの船の船長か？」
そう言って顔を出したのは作品内でも時たま見る中将。モモンガだった。
それが出会いで諸々事情を話し海賊を海軍に引き渡した俺は、そのまま海軍本部へ向かっていたモモンガに厄介になりながら一緒にマリンフォードへと向かったのだった。

ちなみにこの時のモモンガは大佐だった。若いなぁー。

◆◆◆

そんなこんなで今の状況というわけで。

「そこー！ダラダラするな！」

「……あ、俺？」

「当たり前だ！お前以外に誰がいる！あと上官には敬語を使え！」

やべ、考え事してたら怒られちゃったぜ。テヘペロって会ったら許してくれないもんか。

とまぁ今はそんな感じで訓練中です。

みんなで校庭で体を動かしましょう。いぇーいと言うやつだ。

……つまらん。

そんでもってさらに俺の胃に穴が空きそうなことといえば――

「お前は訓練中にタバコを吸うな！」

「あ？」

「君！なかなかのキレだ！そのまま続けたまえ！」

「は！ありがとうございます！」

――煙のおじさんと黒い檻のちゃんねーが同期ってことなんすよね。

いや、なぜに？神様は俺の胃に穴開けたいの？

煙のおじさんはいっつも上官のおっさんたちと言い合いなってるし、黒い檻のちゃんねーは……真面目やな。うん、真面目。上官からの評価も高いし、特に文句はないな。うん。ただ、原作みたいなツンとした態度はまだあまり見ないな。

それにしてもあの二人の下っ端が着る制服は新鮮なもんだな。

スーツの黒い檻のちゃんねーもいいけどあの服装もなかなか良きだ。訓練中の良い癒しです。

黒い檻のちゃんねーが９歳上で煙のおじさんが１１歳上だったかな？

となると……１９歳と２１歳か。そこに１０歳のガキの同期もプラスと。これもうわかんねぇな。

にしても１０歳でよく入隊させてくれたものだ。まあ、海賊船１つ

鎮圧できる実力があってワノ国から逃げ出して行くあてない子どもだもんな。
まあ保護の名目もあるのかもしれんな。ま、生活出来る環境ならなんでもいいや。
いつかは海軍辞めるだろうけどそれまでは甘えておこう。
「そこ!」
……また注意された。もうやめよっかな。
◆◆◆
訓練も終わり夜中の時間。俺は海岸に来ていた。
何しにって？最近練習してるものがあるんだよね自分。
そして俺は海水に手を漬け、そのまま皿のようにして水をすくい上げる。
そして、
「”撃水(うちみず)”」
そのまま海に向かって手にある海水を投げる。
そう、俺は今魚人空手と魚人柔術を練習中なのだ。
まあ、能力者になっちゃったからね。海でも戦えるように海を利用する戦闘法を覚えとかんといざそうなったら動けないからね。
無人島で立ち往生してた時にわかったことなんだけど能力者だからといって海に入ったら動けなくなるのかと言われたらそうじゃない。力が入らない＋能力が使いづらくなるだけだ。そう動けるわけ。体は浮かばないけど。
てことはだ、てことはだよ。海中での戦い方とその場に留まる方法さえ確立すれば能力者だとしても戦いを続行できるというわけだ。
弱点は埋めていかんとね。
そんなわけで今日も俺は海と触れ合いを続ける。

第14話

あれから幾ばくか時間が過ぎた。
結論を言えば魚人空手や魚人柔術は無理でした。
無理無理無理。無理寄りの無理。
まず水が言うことを聞かん。これは魚人空手とか魚人柔術の感覚が掴めないからなのか、それとも悪魔の実を食べたからなのか水を操れなかった。
まあ、人体に含まれる水分を利用した打撃系の技はなんとなくだが出来てるんだが水を操っての攻撃がまじで無理。
”撃水”とかあたりは馬鹿力にものを言わせてそれらしい事はできたけど多分本来とはまるっきり違うし。
なので諦めた。
その代わり、
「――よし、それらしくはなってきたかな」
悪魔の実、太陽の力を魚人空手、魚人柔術に落とし込み指向性を持たせることにしてみた。
すると、まあなんてことでしょう。戦い方の幅が拡がったではありませんか。
”爆発（プロミネンス）”とかは手のひらとかから爆破を一面に撒き散らしていたけど、魚人柔術を使えば一点にさらに軌道も変えて飛ばせるようにもなった。
これは棚ぼただ。
おかげで無駄な破壊も無駄な火力も抑えることが出来た。
サイコーだね。
「てか、もう朝になるのか……とりあえず戻るか」
そろそろ朝日が昇ってくる。いつもの夜の特訓を切り上げ俺は寮に戻って行った。
◆◆◆
「ふあぁぁぁ……」
「最近あくびが多いわね」

「どうせただの夜更かしだろ。これだからガキは」
「……煙くせえよおっさん」
「あぁ!?」
1夜明け、ただいま煙のおじさん、〝スモーカー〟と黒い檻のちゃんねー、〝ヒナ〟と行動していた。
最近この3人での行動が多い。この前だって俺たちで一隻の海賊船を沈めたりした。
海軍に入って半年とちょっと。歳を1つ重ねてる間に俺たち3人は新兵の三等兵から一等兵へと階級が上がっていた。
「ハイハイ、2人とも喧嘩はやめて」
「……チッ!」
「ボクワルクナイ」
そんないつものやり取りをしながら町を歩いていた。
今日は近くの町の見回り。今日はというか、ほぼそんな毎日を送っている。
「にしても暇だなぁ」
「それに越したことはないでしょう」
「と言ってもやることないとそれはそれで…ねえ?おっさん」
「……まあそうだな」
いつもこうだ。
のんびりと3人で日がな1日歩きながら特に何事もなく終わる。
そんな生活が続いている。
今日もそんなこんなで終わるのかとそう思っていた時、
「た、大変だ!」
「「ん?(あ?)」」
1人の漁師が慌てて街を駆けてきた。
その慌てようはかなりのものでなにかトラブルがあったのか。
「あ、海兵さんたち!」
「どうかされましたか?」
「か、海賊が!」
そう言って漁師が指さす方は海。

よく見てみれば奥の方に小さな影が見える。その数は5。あれのことだろうか。
「5隻あんね」
「おいガキ。お前のボートは？」
「停泊場に停めてるぞ。あの距離なら飛ばせば1分もかからない」
「それじゃあ私たちで行きましょう。近くのほかの海兵たちに市民の避難をお願いして……」
そんな会話をしながらも俺たちの足は走り出していた。
……いや、若干1名浮いて飛んでるけど。煙ってずるくね？
はてさて、そんなことを思いつつも十数秒で俺のボートまで来た俺たちは早速乗り込んだ。
後ろに取り付けたエンジン機構に手を当て能力を使う。
これは俺が作った蒸気船だ。初期の初期の初期段階でごちゃごちゃしてるがまあ、実用性はあるから使ってる。
タンクに入った海水を爆発的に熱して気体、蒸気へと変換。蒸気になると体積は１７００倍になり膨張したそのタンクの体積は取り付けたパイプから海へと放出。それを推進力として進むことが出来るという訳だ。
まあ、改良の余地はあるわけなんだが。原作でエースの乗ってた小舟バリにスタイリッシュにしたいと思ってる。
「流石に速いわね」
「…お前の作ったそのエンジン、どういう仕組みだよ」
「企業秘密」
ちなみに俺は能力者ってことを隠してる。
そりゃ図鑑にものってない、四皇が求める程の実とか地雷しかせんわ。
海軍のお偉い五老星とかだって多分この実の存在知ってるだろうし、知ってて秘匿してるだろうし。なら、バレる方がリスク高いでしょ。
「ま、そんなことよりもう着くよ」
「……大砲の玉飛んできてるのだけど？」

「はい、おっさん働いて。俺はよけんよ」
「チッ、てめぇ後で覚えてろ…”!ホワイト・アウト!!!」
そう言いながら前に広げた腕を煙へと変化させ広範囲に広げ大砲の玉を受け止めるおっさん。
さすが。
「ヒューヒュー、いいぞぉおっさん」
「うるせえガキだなほんと…!」
「はい、2人ともはしゃいでないで突撃するわよ。ヒナ突撃」
そう言ってヒナは左側の船へと飛んで行った。うわぁ、”月歩”使ってる。さすがエリート。
「チッ…」
おっさんも逆、右の方へと体を煙にして飛んで行った。
……俺どうしようかな。
「なんだ!?見捨てられたのかガキ!?」
「あ?」
目の前の船。そこの船首に立つ一人の男。
そいつが俺を見ながらそんなことを言っていた。
「まあ、いいさ!野郎どもあのガキを沈めろ!!」
その言葉に了解!なんて声が聞こえてきた。
いや、俺は大丈夫だけどさ、この小舟を壊されるとなるとマズい。俺まだ”月歩”使えないし。
てなわけで、文字通り突撃しよう。
そうして俺はさらに舟のスピードを上げた。
「あ?何してやがる?そんな小せえ船で俺の船に体当たりか?涙ぐましいな!」
そんな声を無視しながら船体に向けて……向けて……向けて、よしここだな。
腰に携えた木刀。あの日親友から貰った愛刀を構える。
そして、
「”天柱(てんちゅう)”」
武装色と太陽の力を纏わせた木刀で下から上へ振り上げる一撃。

バレないように太陽の力は抑えに抑えてるが、本気でぶっぱなすと空へと上る柱のような熱の塊を飛ばす技だ。
今は船を壊して中に入るための穴を作るだけだからそこまで威力はないけど、とりあえずはこれで中には入れる。
ボートに乗ったまま中へそして、断面を登りながらそのまま甲板へと駆け上がった。
「はぁーい海軍さんだよ。てなわけで……お縄についてくれ」
「な！……くっ！野郎どもあいつをぶち殺――」
と船長らしき男はそこまで言って固まった。
「あとお前だけだな」
「え？……は？」
気がつけば船員たちは甲板に伸びている。
簡単な事だ。〝圏境〟使って一瞬で木刀でぶん殴っただけだ。
「ちょ、ちょっと待て！」
「ん？」
「な、何しやがったんだお前…」
「殴った。んじゃということであんたも…」
「いや、ま、待っ…！」
◆◆◆
「船を壊すなよお前。全員運ぶの大変だったんだが？」
無事に海賊たち全員をしょっぴいた俺たちは街に戻ってきて引渡しをしていた。
「ま、捕まえれたからよしということで」
「はあぁ…」
いつも俺は呆れられてる気がするな。
おっさんもヒナも少し離れたところで別の海兵と手続きをしていた。
「んじゃ俺も腹減ったんでお暇しまーす」
「……俺お前より上官なんだが？」
「え？あ、うん。知ってるけど」
「……はぁ、もういい。行け」

「ういーす」
お許しも出たし、おっさんとヒナの方へ向かう。
ちょうど2人も終わったらしく、俺に気づいて近づいてきた。
「腹減ったー」
「確かにな」
「どこかで食べていきましょう」
「ラーメン食お。ラーメン」
「「昨日食べたでしょ（だろ）」」
いいじゃん、ラーメン美味いのに…。

第15話

ある日の事だった。
その場所は賑やかだった。世界中のありとあらゆる場所から集まった海兵たち。海軍本部マリンフォード、食堂。
昼時ということもあり下っ端海兵を始め、中将達数名も利用していてかなりの人数がひしめき合っていた。
そんな中にスモーカーやヒナの姿も見える。
そうして海兵達が互いに親睦を深め合う空間。
次の瞬間、食堂の壁が盛り上がり、ヒビが入り、そして、弾け飛んだ。
「「「っ!?」」」
「て、敵襲か!?」
「構えろ!」
そこは歴戦の戦士。
予想外の展開に即座に指示を出す中将。
しかし、砂埃が晴れたその先にいたのは、
「あ、あのジジイ……やってくれんじゃねーか」
頭を抑えるカグラがそこにはいた。
◆◆◆
今日はなんか大事な報告会議ってことで本部の方にやってきてるわけなんだが、暇だ。
そんなことを思いつつ建物内の廊下を散歩がてらに歩いていた時だった。
「おぉ!カグラ、来とったか!」
せんべい片手にガハハと登場した1人の巨漢。
「ガープ…」
「久しぶりじゃの!どうだ、調子の方は」
ガープ。俺が海軍入りたての頃に興味を持たれて半ば無理やり特訓という名のしごきをさせられた仲だ。
「……ボチボチ」

「……悪くなければ良し！どうじゃ？久方ぶりに特訓でもしてくか？」
「ずぇっ……たいに嫌だ」
「なんじゃ、連れんなぁ…」
そんな会話をしながら2人並んで廊下を歩く。
片や巨漢の老人、片や小柄な子供となかなかに凄まじい構図になってるなという思いは胸にしまっておく。
「てか何かあったのか？」
「？どうした急に？」
「いや、みんな慌ただしそうだなって。今日の報告会議？も急遽らしいじゃん？」
「あぁ、あれじゃ。マリージョアにフィッシャータイガーが乗り込んだんじゃよ」
ああ、あれか。
確かに原作15年前くらいの出来事だったし……そうか。
「天竜人、ざまぁ」
「なんじゃカグラ、お前天竜人は嫌いか？」
「でぇ～～っ嫌いだね」
「そうか、ワシもだ」
知ってる。
まあでももうそんな時期なんだな。
物語が徐々に動いていってるのはなんだか少し感動する。
「さて……」
そんなことを言いつつガープが食べ終わったせんべいの空き袋をポケットにしまい拳を鳴らした。
「行くぞ、カグラァ！」
「……は？」
そんな叫びとともに眼前に迫る大きな拳。
呆けた顔をしつつも反射で体は動いていた。
腕を間に滑り込ませつつ拳の軌道をずらす。耳に風切り音が聞こえてきた。

「……今の直撃したら危なかったでしょ」
「そうじゃな。だから……降りかかる火の粉は払わんとなぁ…」
「脳筋ジジイがよ…！」
笑うガープに思わず苦い顔になる。
掠っただけ痺れる腕。
背中に嫌な汗を感じた。
◆◆◆
「あ、あのジジイ……やってくれるじゃねーか」
思わず溢れる言葉。頭をおさえ立ち上がる。
目の前のぶっ壊れた壁そこに浮かぶ大きなひとつの影。
「なんじゃ、ピンピンしとるのぉ」
「舐めんな」
砂埃を払いながらやがて出てきたガープを睨みながら構える。
「が、ガープ中将……」
「……中将と戦ってるあのちびは誰だ？」
「あれだろ、モモンガさんが連れてきた新人」
「あぁ、あのガキか」
「なんでそんな子供がガープさんと？」
聞こえてるわボケェ。ガキガキ子供子供うるさいねん。そんなん俺が聞きたいわ。
「何やってんだあのガキは」
「……私は何も見てない。ヒナ無視」
助けにくらい来いよ、同期共。
「よそを気にしとる場合か」
「っ！」
そんな言葉に反射的に体を動かしその場から離脱する。
陥没する地面。その中心に拳をめり込ませたガープがいた。
「ほれほれ、どんどん行くぞ！」
そんな叫びとともに向かってくるガープ。
一度二度と振られる拳は1発でも直撃すれば瀕死に持ってかれる威力があった。

それを紙一重で避けつつ、たまに腕を添わせて軌道をずらし、見聞色の覇気を使いつつ捌いていった。
「お、おぉ……すげぇなあの新人」
「ああ、よくやる」
お褒めの言葉ありがとう。
でもごめんね。そっちに目も向けれないし声もかけられない。そんなんしてたら死んじゃう。
と、その時だった。
足で何かを踏む感覚。次の瞬間、そこが一気に滑り体勢を崩した。
「「「「「あ」」」」」
自分の声と周りの声が重なった。
感触的にはバナナの皮。食堂だもんね。そんなこともある。
なんて言ってる場合でもない。体勢崩してててさらに目の前には隕石のごとく迫る拳。
不味い。
「歯を食いしばれぃ！カグラ！」
そんな声が耳に入り、ガープの拳が顔面に突き刺さった。
が、次の瞬間。拳は顔を逸れ、俺の掌打がガープの顎に入っていた。
「ヌグッ!?」
「……うし」
呆けるガープの懐に潜り込みそのまま掌底の一撃を腹へとぶち込む。
「グッ……！」
踏ん張るガープを他所に、そのままバックステップで距離をとる。
”流した”のに顔が痛い。さすが拳骨さんだな。
「ぬぅ……相変わらず手痛いカウンターだのう…」
顎をさすりながらそういう。
嘘こけ、全然聞いてないくせに。
「な、なんだ？新人は何をしたんだ？」
「わ、わからん」
「……ガープ中将の拳の威力を流しながらそのまま自身の掌底に乗せ

て一撃を返したという感じか。上手いな」
「え？い、いきなりどうしたお前？」
格闘技ファンの海兵がいるのか。よくわかったな。
「よし、ちと本気を出していくとするか」
「……やめて？」
羽織っていた〝正義〟と書かれた羽織と、更には上着も1枚脱ぎ青いTシャツ姿となる。
オイオイ、死んだわ俺。
「行くぞ――っ!?」
「シッ！」
踏み込もうとするガープに逆に踏み込んでいき、裏拳を顎へと走らせる。
攻めてこられるのに黙ってウケに待ってるのはバカ。歩き出しは隙が多い。そこを攻めていくが、
「……と、危ないのぉ」
体勢を後ろへと倒し余裕で避けられた。体幹と反応速度が良すぎだろ。
となれば、
「ぬっ！」
そのまま脇下の袖をつかみ腕をくぐりガープの体へと密着。
もう片手で手首をつかみそのままの勢いでその巨体を投げた。
「ほう、やりおるわい」
「フッ！」
落ちてくる首元に向かって足刀を走らせるがすぐさま手を着きそこを軸に回転しながら回避。体勢を建て直しそのまま息もつかずに突進してきた。
このジジイ、体格とパワーのゴリ押しできやがった。
タックルされたらもう終わる。この馬鹿力から逃げる術が今のとこない。
となれば、
「っ!?」

驚くガープの顔。
そんなガープに背中を向けそのまま回し後ろ蹴りの勢いで踵をガープの顎に目掛けて下から上へ走らせる。
かなり大きな音が鳴り響きガープの体が仰け反る形で吹っ飛んだ。が、顎じゃない。そこに腕を差し込んでダメージを抑えていた。
でもそれでいい。そのがら空きになった腹に向かって右肘を前に突き出しそのまま体当たりでガープを吹っ飛ばした。
「「「「おぉぉぉぉ！」」」」
周りからの歓声が気持ちいい。ありがとう。
「な、なんかよくわからんけどすげぇ！」
「あの巨体をあの小さな体でよく…」
「全体重を乗せた踵のカチ上げで体勢を崩し、ガラ空きになった胴へ右外門頂肘で人体急所の肝臓を的確に撃ち抜いていた。ガープ中将のような全身筋肉の塊のような人じゃなければまず立てないだろうな」
「よ、よく分からねーが解説ありがとう」
そんな会話を耳にしながら息を吐く。
さすがに疲れた。体力というよりあのガープとの戦闘という気疲れみたいな感じだ。
そんなことを思いつつガープの飛んで言った先を見る。
そして、
「ぬぁぁぁぁぁぁ!!!」
「っ！」
びっくりした。
叫びながら出てきたガープ。
「いやー、久々にいいの貰ったわい」
そう言ってガハハと笑った。
口の端から血がチョロっと垂れてるだけ。他に目立った怪我はない。
化け物かな？化け物だわ。
「それじゃ、体もだいぶ温まったことだしこっからが本番じゃな」

バカタレが。
こっちは全力で”入れ”に行ってはいないけど本気で”入れ”てたわ。
それでもピンピンしてるとか自信なくすぞ。
でも、
拳を鳴らすガープを見て嫌な汗を背中に感じながら笑うしか無かった。
「おうよ。やろうじゃん」
「その意気じゃ！」
そうしてお互いが拳を引き、距離が縮まり、周りが生唾を飲む音が聞こえてきた次の瞬間。

「ガァァァァァァァァァァァァプッッッッ!!!カグラァァァァァァァァァァッッッッ!!!」

「「「「「「!?」」」」」」
「「!?」」
あ、この声は。
そう思いつつ俺たちが壊して入ってきた壁の穴に目を向けた。
そこには、
「これはどういうことだッ！貴様らッ！」
センゴクのおっちゃんがいた。
……やべー、おっかねー。鬼だぜ鬼。仏はどこぞ？

「食堂で乱闘しおってッ！どういうつもりだッ！」
おっちゃんの言葉に俺とガープは同時に互いを指さして、
「「コイツが悪い」」
「〜〜〜っ！バッカもんがぁぁぁぁ!!」
そこから始まるおっちゃんの説教。
俺たちはそっぽを向きながら地面に散らばった食いもんを口に運ばせながら右から左に聞いていた。
それにしても長い。
こうなったら、
「おいジジイ」
「なんじゃ？」
センゴクに聞こえないように小声でガープに話しかける。
「俺が隙を作る。そしたら、一気に逃げるぞ」
「分かった」
そんな打ち合わせをし、咳払いをひとつ。
「おっちゃん！」
「……なんだ？」
「スモーカーがここでやってもいいって言ってました！」
その言葉におっちゃん含めた食堂内の視線が一気にスモーカーへと向いた。
「・・・は？……はぁ!!??」
よし今だ。
「ガープ！」
「よし来た！」
「な!?待たんか貴様ら！」
そうして俺とガープは壁を破壊しながらその場を後にした。

第16話

「さあ、来てください…！」
どうしてこうなった。
頭を抑え指の隙間から対面に控える青髪の女海兵を見ながら頭を悩ませていた。
◆◆◆
今日も今日とて海軍の海兵としての一日が始まる。
今日は町の見回りはなし。
新人海兵としてのたまに行われる演習訓練の日。
だが面倒くさい。
そんなわけでスモーカーと二人で街に繰り出しサボりを決め込もうとしていたのだが、
「連れてきました。ゼファー教官」
「ああ、ご苦労」
「離せ、てめ……ヒナァ！」
「……はぁ」
溜息をつきながら襟首を捕まれ地面に引きずられる俺と囚人のように海楼石の錠を手にかけられ連れてこられたスモーカー。
「さて、ヒナくん。君は戻ってもいいぞ」
「はッ！」
ゼファーのおやっさんの言葉に敬礼し訓練へと戻るヒナ。
残された俺とスモーカーはおやっさんの前でそっぽを向いていた。
「それで何をしていた？」
「「……」」
「……はぁ」
ため息を吐かれた。
「スモーカーがサボろうぜって誘ってきました」
「…は!?お前が良いサボりスポットあるから来いって言ったんだろうがァ!!!」
「……フッ、まさかヒナにバレてるとは思わなかったぜ」

「テメェ……！」
「よさんか、バカタレ共。全く…」
頭を抑えるおやっさん。
頭痛かい？おすすめの病院紹介してやろうかい？
「まあいい、終わったことをグチグチ言うのは好かん。とりあえず今日はオレの教え子とペアで訓練だ。分かったな？」
「……チッ」
「へーい」
「……この問題児どもめ」
ジト目のあきれ声のおやっさん。
よせやい、照れるだろ。

さて、というわけでスモーカーもあっちに行ってしまった。
そして俺の目の前にいるのは？そう！
「……よろしくお願いします」
青髪海兵、アインだった。
……いや、まあおやっさんの教え子でだいたい予想はしてたけど……こっちね！モサモサくんの方が良かったな！うん！
相手が女性となると……ちょーっと攻撃するのに躊躇しちゃう？
セクハラにうるさい時代だからね。配慮が大変だ。
……まあ確かに煙野郎に女性との組手をやらせるよか俺の方が安心なんだろうけど……いや、うーん。
「どうぞよろしく」
とりあえずは挨拶だな。
腰を曲げ頭を下げる。
さて、そこから始まった組手の訓練。
放たれる拳や蹴りを受け止め流しつつ目の前の彼女を観察する。
しなやかに動く関節にキレのある動作。さすがはおやっさん直下の教え子。動きに無駄がない。
フェイントも入れてきて足さばきもなかなか。

確か……俺の3歳上？となると、14歳か。そんな歳でここまでの動きができるのはおやっさんの教えの賜物だろうな。
「クッ……」
距離を取られた。一撃も入らず焦れったくて息を整えてる感じか。
まあ、さすがに負けません。そりゃ、拳骨英雄や最強生物との実践で鍛えてますから。

そんなこんなで訓練は無事に終了。
さて、今日は街に繰り出して甘味巡りでもしたい気分だ。ヒナでも誘うか。スモーカーは……あいつ甘いの苦手そうだしな。
と、そんな時だった。
「……ねぇ」
「ん？」
背中にかかる声。
振り向くと底には涙目で睨むアインがいた。
「どしたんで？」
「……あなた、本気出してなかったでしょ…」
「……訓練のこと？」
そう聞くとコクリと頷いた。
「だから今ここでもう一度私と組手してください。次は、本気で」
なるほど。
クソ真面目なんだろうなぁとか初めて見た時思ってたけどそこにプラスで負けず嫌い要素もあるのか。
でもなぁ、
「本気かぁ…」
女性に本気で行くというのはな……。
別に舐めてるとかじゃないけど、どうしても加減をつけすぎちゃう。
いや、それを〝舐めてんだろ〟と言われたらあれだけど。

「さあ、来てください…！」
俺の返答を待たずに構えたアイン。
うーん、お話聞かない子。
しょうがない。
「分かった。よーいドンは？」
「いらないです…！」
一歩踏み出し距離を詰めてこようとする彼女に合わせて懐に潜り込む。
そのまま腹、顎の順で掌底を当て、体勢を崩した所へ手を取り足をかけつつ前へ倒れこもうとする力を利用し其の儘一回転空中で回し、背中から地面へ倒す。
「がハッ！」
「これでいいか？じゃ、俺もう行くな」
驚く表情を浮かべた彼女の顔を一瞥し俺はその場を去った。
◆◆◆
「おやっさん、聞いてくれよ」
「……仕事中だ」
「最近あなたの教え子ちゃんが怖いんだよ」
「話を聞け……とは言いたいところだがオレの教え子？」
とある日の昼時。
俺はゼファーのおやっさんの執務室に来ていた。
「アインちゃんのことなんだけど」
「ああ、彼女がどうかしたか？」
「最近あの子……ストーカーになってるんだけど」
「……？」
そうあの青髪海兵、アインちゃん。
あの訓練の日以降、
「アインちゃん、俺のストーカーしてんだけど」
「……お前が彼女のストーカーじゃなくてか？」
「おい、俺がストーカーするようなやつに見えんのか？」
「見える」

「……そんな断言する？泣くよ？」
おやっさんが最近俺に冷たい。おやっさんに何かしたか俺？
訓練サボるくらいしかしてないんだが？……俺が悪いな。
と、そんなことはさておきだ。
「おやっさんから注意してくれない？マジで」
「お前の気の所為ということは？」
「最初は俺もそう思ってたけどさ。この前、夜中寝てた時に視線を感じるなぁとか思ってたんよ。目、開けて窓の外見たらガッツリアインちゃんと目が合ったんよね」
「……うわぁ」
おやっさんも引くほどのエピソード。
あの子怖い。
「まあ、根が真面目すぎるところがあるからな。彼女は」
「いや、真面目とか関係ある？ただのストーカーやで？」
「自分より年下の男が自分より強い。となればその強さの秘訣が気になるのもしょうがない事だ」
「じゃあなに？俺が強い理由知るために俺のプライベートに入ってきてるの？マジ勘弁」
この前だって食堂で近くを通りがかった時に熱心にメモ帳見てたからちらっと見て見たら俺の歩き方の足の角度やら腕の角度やらが書かれてて見てはいけないもの見た感じがしたしな。怖すぎ。
「……カグラ、お前は今何歳だ？」
「ん？……１１歳だな」
「そうだな。それじゃあアインは？」
「……１４？」
「そうだ。いいかカグラ、お前はなかなかに大人びてる節がある。でもお前より年上である彼女は１４歳。１４歳というのもまだまだ子供なんだ。真面目ながらに不器用。どうすればいいのか分からないからとりあえず行動してるだけさ」
なるほど。理解はした。でも納得はできない。
「てことでだ」

「ん？」
「俺の弟子の面倒見てくれ」
「……は？」
何言ってんだこいつ？
「アインだけだと不公平だ。ビンズのこともよろしく頼むぞ」
何言ってんだこいつ？（２回目）
「……え？嫌なんだけど」
「お前の格闘センスはハッキリ言ってその歳で既に海軍トップだ。戦闘力などではボルサリーノやクザン、サカズキにガープ、センゴク……あの辺には程遠い。だが、その体の使い方。小柄ながらにアイツらとの差を縮めるための技術。〝武〟というジャンルで言えばお前以上はいない。俺の弟子たちのレベルアップに付き合ってくれ」
「やなこった」
絶対めんどくさいじゃないですかヤダー。
「……訓練を合法的にサボらせてやる」
「うーし、いっちょ揉んだりますか」
おやっさんの言葉に指の骨を鳴らしながら立ち上がる。
別に俺はちょろいやつじゃない。そうですとも。
そんなことを考えながら部屋の扉を開ける。
「あ…」
そして、そのすぐ前にいた青髪に向かって口を開いた。
「てなわけで、以後よろしく。アイン……ちゃん？」
「……へ？」
惚ける彼女の肩を叩きながら横を通り過ぎ俺はその場を後にした。

第17話

○月???日　天気：晴れ

今日から日記をつけてみようと思う。
と言っても何も書くこと決まってないけど…。
とりあえず今日あったことと言えば先日ゼファーのおやっさんから頼まれた弟子2人の指導がついに始まった。
結論言えば……俺から教えれることなくね？である。
いや、もう動きの基礎とか完璧すぎて。改良の余地はないんだよねこれ。さすがおやっさんの弟子。しゅごい。
まあそこから応用したりとかすれば戦いの幅が広げられるわけだからそこを教えてやれってことなんだろうけど……いや、ムズィーー！
言っちゃなんだけど俺の武術ってほぼ我流だからね。色んな武術の基礎を覚えてそこから自己流に変化させたわけだから。
つまるところ、俺の使う武術は〝俺の体に最適な動き〟なわけであって、アインちゃんやビンズくんにとってはまた違うわけよ。
……他人に物教えるって難しいと実感した一日でした。

▽月□日　天気：俺の心は雨模様

指導が始まり早1ヶ月。この1ヶ月間は怒涛だった。
まずアインちゃんが四六時中俺に付きまとってきて怖かった。
「腕の振りの角度は!?」「歩いてる時の気をつけることはなんでしょう」「食事をとる時はまず何から食べますか？」「あの時私にかけた技をここでもう一度かけてください！」

……いや、ねえ？うん。……どうした？
え？おま、そんなキャラなの？と困惑が隠せてなかったと思う。
てかそんなに日常から気をつけることなんてのはないよ。それどんな苦行？
別に俺に気があるから関わってくるとかそんな感じじゃなくて、こう、マジで心の底から学ぼうとする姿勢？真面目さは感じられたよ？うん。
いやでも度が過ぎるのも考えものだと思うのお兄ちゃん。
そんな中の癒しはビンズくんでした。差し入れでコーヒーとかよく持ってきてくれたり、肩揉んでくれたりして。お前……いいやつだったんだな。
ただ、俺の事兄貴って言うのやめような。俺の方が年下なんだから。

★月●日　天気：曇り時々曇り

最近、アインちゃんとビンズくんに指導してるのを見ていて興味を持ったのかヒナやおっさんもよく参加するようになった。
俺とかアインちゃん、ビンズくんは訓練の代わりの訓練ということで普段の訓練を免除されてるけど同期組は普段の訓練してからこっちに合流してくる。体力お化けかな？……いや、まあおっさんに関しちゃ暇つぶし感覚できてるっぽいけど。
ヒナに関してはさすが優等生。ハッキリ言えばアインちゃんやビンズくんに比べると型が綺麗です。さすヒナ。
なんなら逆にヒナに月歩とか俺がまだ使えない六式教わったりしてるし、ｗｉｎ―ｗｉｎやね。
おっさん？あれはタバコ吸ってるだけの生き物だよ。
煙っていろいろ応用効きそうな能力なのに努力しないものね。そんなんだからケムリン（笑）とか呼ばれるんだよ。
みんなが覇気使えるようになってきたらボコボコにされる未来が

見える見える。

月　日　天気：

疲れた、寝る。

月　日　天気：

（ペンで書きなぐった跡があるだけで読めない）

十月―日　天気：いつか俺の心は晴れるはず

最後に日記を書いたのが3ヶ月ほど前という事実。

もうね。もう地獄だった。

ヒナ、おっさん参加して1週間経った頃だった。

ボルさんやらクザン兄やらサカズキのクソジジイやらも顔出すようになった。

組手という名のシゴキされるしで、しかも3人連続。殺す気か？どゆことやねん。

さらに終わって休んでるところに拳骨の襲来という。さらにそれの余波で壊れる建物を見て仏のありがたい説教まで。フルコースですねありがとうございます。

そんな中にも海軍としての仕事もあるしで毎日死んだ魚の顔で動

いてたと思う。よく生きてんな俺。
まあ、それのおかげなのかどうなのか。見聞色の覇気の練度がだいぶ上がった。
連続組手とか、拳骨さんとかあの方々が奇襲まがいに能力使ったりしてきてそんな生活続けてたら未来が見える頻度がかなり上がった。
いやー、棚ぼたですわ。ありがとうは言わないけど。
あとはこれを任意で使えればいいんだけど、そうすりゃ俺もカタクリに並べるぜ。待ってろ杉田。
あとは覇王色の覇気なんだけどこんな生活続けてたからなのか防御しようとした時に6割の確率くらいで纏って軽減できるようにもなった。やったぜ。
……やっぱ思ったけど俺の戦闘面の成長の仕方がバカみたいに早いよね。他のキャラたちはここまでトントン拍子ではいかないでしょ。みんながみんな俺みたいに強くなってたらこの世界魔境すぎるわ。
前世で武を嗜んでたからなのか、いや、少なからずそれの要素もあるかもしれんがやっぱりこれが俗に言う転生特典的な？そういうやつなのかね？
いや、これは俺の隠されていた才能なんだ。そうだ。きっとそうに違いない。そう思いたい。

？月！日　天気：雨―曇り＝晴れ

思えばもう1年。俺も歳をひとつ重ねた。これでまた1歩死に近づいたね。
この1年なかなかに濃い日々だった。アインちゃんとビンズくんを指導し、ヒナから六式を教わり、おっさんのパンツを海軍基地中に隠したりして遊んだり。
ボルさんの仕事手伝ったり、拳骨が襲来してきたり、クザン兄と買い物行ったり、拳骨に奇襲されたり、クソジジイと喧嘩したり、拳骨

にしごかれたり、仏に怒られたり、拳骨も一緒に怒られたり……拳骨の頻度が多すぎるんじゃあ！

とりあえず当初の弟子2人のレベルアップはおやっさんの予想を遥かに超えるほどでとりあえずもういいだろうということで俺の指導は何とか一旦終わりを迎えた。長かったァ…！

俺の覇気の方もかなり洗練されてきて三大将さん方と何とかやり合えるようになってきた。打倒カイドウに近づけたね。

ただ、自主練とかはあまり出来なかったこともあって武装色の覇気の流桜は未だ未完成だ。いや、弾みでできる時はあるけどね？ただ、出来て1割という未完成っぷり。とりあえず当分は流桜使えるように特訓していこうと思う。

あ、そういえばストレスを海賊にぶつけまくってたらいつの間にか准尉になってました。給料がっぽりでホクホクです。

最年少でさらに最速での出世らしい。これでおっさんを見下せるね。やったね。

大変だった1年。しかしてなかなかに楽しくもあり、自分の糧にもなったので良しとしよう。

さて、明日は良き日になりますように。おやすみ。

♡月♥日　天気：やまない雨はない

仏さんから女ヶ島に行ってこいと司令が来ました。

あれです、ボア・ハンコックを七武海に勧誘して来いってやつですね。

……ナジェオレェ？